江戸名所圖會

十三

W245
20

戸塚　今高田に属す古ハ此地の惣名とす北条家の分限帳ニ恒岡弾正忠牛込にて冨塚の地を領せられし注せり　江戸鹿子に昔洪水の時此地を
ふせきしハ戸を以さゝゆるかことく水防にかゝりしゆゑ名とせるよし記せとも信しかたし
たゞし里老の説に宝泉寺の地に冨塚と云ありて本の名も冨塚村と号く今ハ
冨を戸に改むると云云或人云旧岡本氏某の領地に古き塚ありて白狐の窩とせ
戸塚ハ狐塚を誤りて唱ふるなりと又此辺昔古塚多くありしかば十塚と呼しなる
べしともいへり按に狐塚といふハ水稲荷の社の傍にある塚のことをいへるなるべし高田雲雀
とかいへる草紙に戸塚の祠ハ宝泉寺にあり此所に狐の形の石の扉ありて背より戸塚とはふとあり

百八塚　今其所在さだかならず里老伝へ云往古昌蓮といへる冨民
仏に供養のため此高田の辺より大久保迄の間すべて百八貫の塚を
築くと今ハ悉く其所在をしらず
按に中野村熊野十二所権現の別当に成願寺といへる禅林あり其寺記に鈴木
荘司重邦の後裔鈴木九郎といへる者あり紀州藤代よりしも応永の頃武州
に来り中野の地に住す其家大に冨をなせり然れど宿因にや其娘夭死す
九郎大に歎き居宅を壊ちて精舎とし女の法号正観を以て寺号とし自らも
又名を正蓮と改むるとあり昌正同音なれハ此百八貫の塚といへるも若くハ此人の
造立せしならん或云今馬場下町を供養塚町と唱ふるも旧称の残れるなり
みやと云云再び案るに此地を昔冨塚と号けしも冨民の制せるなれハ彼供養
塚を冨塚と唱へしを中古より美の一字を畧して登津かとハ唱ふるなるへからん

高田天満宮　同所八幡宮より馬場の方へ行道の右側にあり別当を

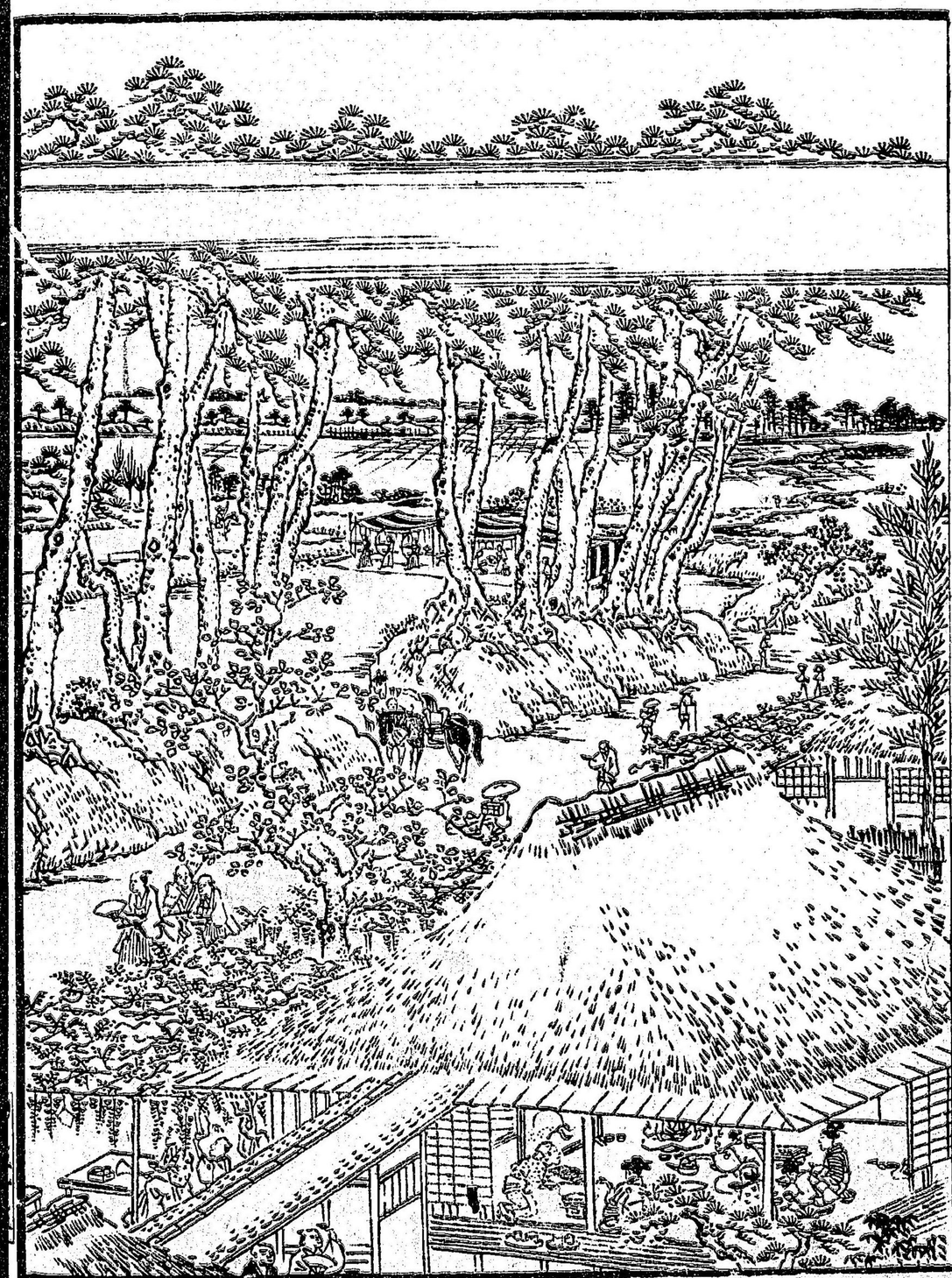
W245
20
国立国会図書館蔵書
贈寄 西村妙子殿
56.10.-5
81W51785

真言宗ゆーしく真定院と号し神躰ハ菅神手造の霊像なり
一寸八分ありと云相伝ふ寛永の頃　大樹此神像を大橋立慶ふ
賜ふ　此立慶ハ人ホ堪能の人ゆ大橋流筆法の始祖なり菊岡沾涼の人ゆ按ふ
息男大橋長方卿ゆ重改家流ゆ出ル一家をも是世間ふ所留大橋
流と称せり　依て立慶當社を建て神前ふ懸ふの戸帳ふ其旨
趣を記し置とのこと　當社の旧地ハ牛込済松寺の辺り今天神町と唱ふる地
記せし祐筆大橋立慶ふ高田大夫の屋敷を望海無諸といつこ冊子ふ寛永七年の津実を
とあり地ふ天神の宮あり地を記せり証とし
を収むる由云へり　社前ふある所の龍神及び鬼子母神なる石像ハ
昔此地ふ経蔵ありし頃守護の為ふ造立せしとの
按ふ當社の傳ふハ大橋立慶大樹より和の菅神の像を一社ふ奉
とあり旧地を天神町とす土人済松寺の地昔ハ大橋氏の宅地なりしハ南向
亭茶話ふ云大夫宗五郎義延自らの宅地ふ太宰府の天満宮を迎しまつり
地を天神町と号く後高田ふ移も大橋長方卿奉祀の江戸鹿子ふ二百余年ふ及ふ
も今猶存ふ　再ひ按ふ元禄二年開板の三十六歌仙の僧
とあり依て考へふ大夫義延ハ寛永の頃の人なれハ其頃宅地ふ勧請せ
を後大橋氏ふ居住　按ふ寛永ハ寛恕の今ふ至て永二百年ふ及ふ
高田馬場　同し北の方ふあり　追廻しと称し二筋あり竪ハ東西へ

六町ふ横の幅ハ南北へ三十余間あり相伝ふ昔右大将頼朝卿隅
田川より此地ふ至て軍の勢揃あり旧跡なりと土人の説に
慶長年間越後少将忠輝卿の御母堂高田の君遊望の餞として開せ
らるゝ所の芝生なりしを寛永十三年ふ至て今のごとく馬場を築き
弓馬調練の所となるとしるせり　或人云林丹波守勝正加藤左内河村
吉左衛門等是を司とり又云北の馬場ハ武田信玄入道小田原の北条家を攻る時馬を試られ
たり旧跡なりしと北の方の松の列樹ハ享保の頃
賭的大的小的騎射外能雑子土佐外記故下の類ゆ賑ひしなり
大将軍家御代の始ゆ国家安全の為祈禱の為嘉例とし
此地ふ於て流鏑馬の式あり形装善尽し美を尽せり式の図説ハ
穴八幡の別當故生會寺ふ収蔵せり文章ハ神田白竜子撰
ものなり

按ふ此地を高田と唱へ来へ近新小田原北条家の西頭後帳ふ太田
新六郎氏領の中ふ高田内赤沢分同添田分なるの地を注し如ふ又赤沢平蔵領
とし人の江戸高田ハ千寿成人の間赤沢後家ふ附　同書ふ

高田馬場



和田戸山　尾陽君侍館の地なり是を戸山陣邸と云（戸山城ハ土人相外山ヲ作る）
傳ふ此地ハ往昔和田戸何某とぬいひ武士の住しかハ右
大将頼朝卿隅田川より此地に至り和田戸ヶ第ヲ入ゆ軍勢の
労を休められしことあり（今ハ地ヲ和田戸明神高田馬場の宮社ありと云）
南尾州侍山屋鋪へ行方の畑の中ヲ一條の道あり里老傳へて
上古の鎌倉海道なりしとぞ
荒龍山　同所戸山と大窪諏訪の森との間をいふ此あたりハ
雲雀の名所なり
山吹の里　高田の馬場より北の方の民家の辺を唱ふ此地今向砲刑場と号
相傳太田持資江戸在城の頃一日戸塚の金川辺より
放鷹を時携しかハの鷹翔く飛去れバ跡を追ひ
こゝに来る時ハ急雨頻あれハ傍の農家に入て簑を乞ふ内より
小女出盛なる山吹の花を折て是を持資に捧ぐ是を持資
詞を聞て持資ハ意を悟るを得ざるを却て憤を含み家に
帰り近臣に事のありしを物語る中に一人進出て云ふ是ハ簑の
なきとのたまふ古哥ハ（後拾遺集）
七重も山吹の花の一重だに実の一つだになきぞかなしき
詠せ一和哥の心を答へ難しとのたまふ
深く恥て後和哥の道を慕ふと云
此七重八重の和哥ハ後拾遺集に中務卿兼明親王の詠なりと言葉集に云
小倉の家に住しかハる頃雨のふりかゝる日蓑なくして人のきたりしかハ山吹の枝を折て
授よ此山吹の里のハ和漢三才図會俗説辨惑通鑑等の中に載る
神奈川戸塚の金川と潜実を流る小溝を今蟹川と唱へ
是ハ加平川と唱へ
三島山　同所民家の後園にあり古松四五株繁茂せる樹蔭に三嶋
明神の祠倉あり相傳ふ右大将頼朝卿此高田の地に軍兵勢揃

山吹の里八重田の郷より北の方民家の辺をいふ昔太田持資江城ありし比一日此戸塚の金川の辺を放鷹し急雨に遇そ傍の農家に入り蓑とかんとをもふ時に内より小女出て翔かく窓りなる山吹の花一枝とをく持資に捧くるに後拾遺集に七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞあやしき
ある業明親王の和歌をもつて答へられて今も其事を賞し世よ伝へくる吳竹と

あり。頃此御神を勧請なしまつると云。此山岸より少しさがりて甘泉あり是を山吹の井と唱へり土人或ハ三島明神の御手洗又ハ頼朝卿の馬の冷し場なりともいひ伝へたり

高田七面堂　同所道より左如意山亮朝院と号る日蓮宗の寺ハ安房国身延山の七面堂と云　同木同作なりと云　当寺開山日暉師感得あり。霊像なりしゆへ縁起云延山第二十六世日境上人霊告再三ハ及ぶの後亮朝院日暉師ハ是を授与す依日暉師此地五明村より草庵を結ひ此本尊を安置ハ慶安元年の春荒蘭山ハ社地を賜ひ七面堂を造営せしめ御武運長久國家安全の御祈禱所ハ余せる寛文十一年荒蘭山の地ハ尾陽公の御山荘となり同二年日光御社参あるべしとて今の地ハ迂遠なり一部一巻の法華経を献し奉る所の守刀と御護りあり一部一巻の法華経の守刀と題目の七字を彫しめ給ふ御帰城の後奉くり御経の表

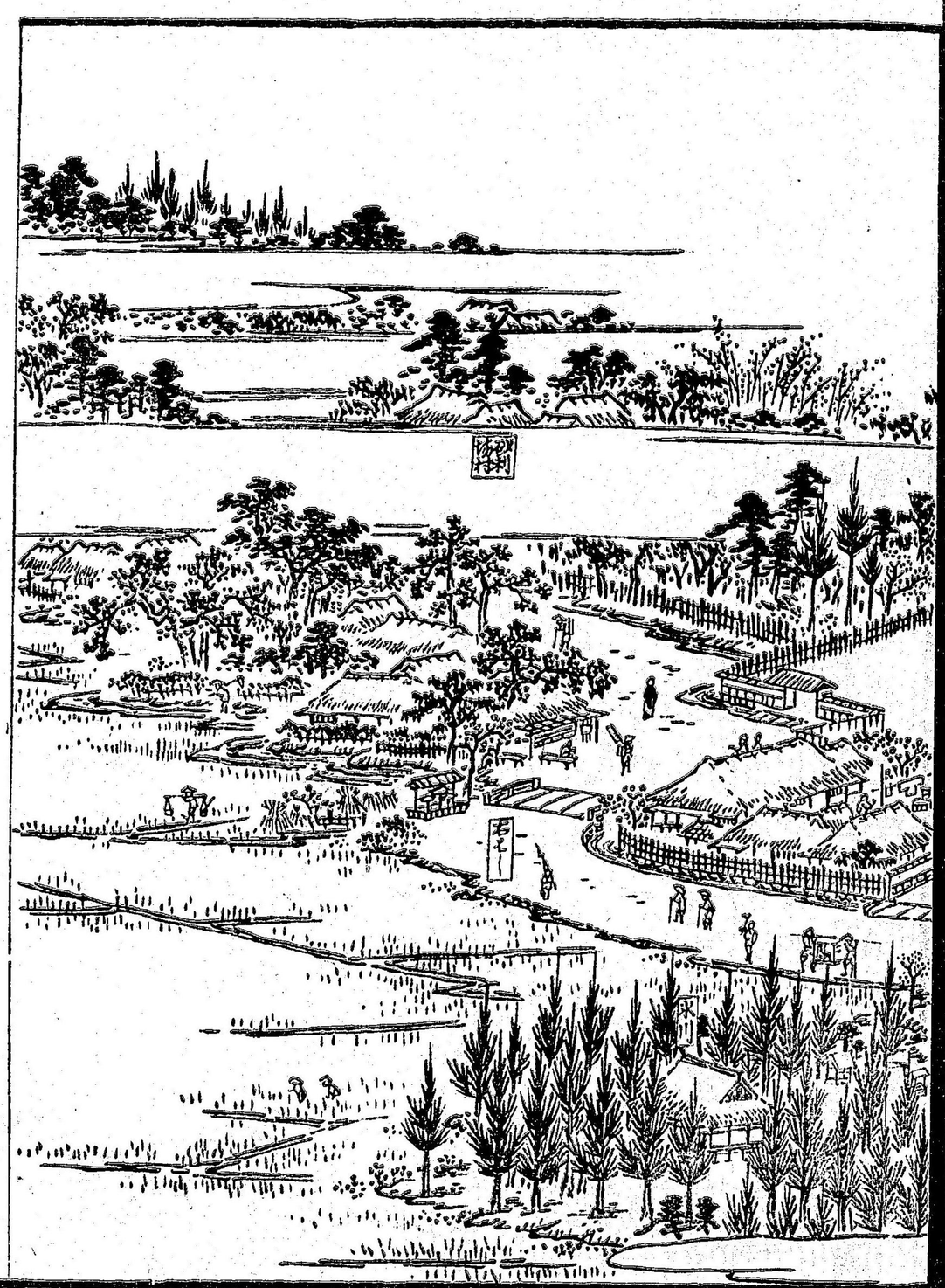
亮朝院

高田
七面堂
朝日櫻

しその傳

橋より見たその姿

紙の裡ニ七面大明神と浄筆あり浄譜をも書添られ
當寺ハ今猶當寺三種の
世尊堂 堂内ハ釈迦如来の像を安置
朝日堂 朝日上人の像を安置此堂内ハ修行ある常題目ハ法善院
乗院日了上人常ハ眼病を患ひ給ふ日蓮大士の像を日朝上人ハ作り給ふ
今當寺より出る眼病救護の霊符を授く現益を蒙る者
朝日櫻 同時朝上人の愛樹ありと云
傍の橋 同し北の方上水川ハ架せる長十二間余あり昔ハ板橋あり
しかる近頃ハ土橋とあり 此橋を姿見の橋と思ふハ誤 此辺の蛍ハ形大ふ
しかる光り他ハ無しと
姿見の橋 同し北の方ハ架せる小橋を号く昔ハ此橋の左右に池
ありて其水清く流る故ハ行人覩れハ鏡の面ハ相對する
如く水面湛然たる故ハ名とも或ハ寛永の頃
大樹此地へハ故鷹の時鷹翼ある此橋の辺ハ見出
台命ありて此名を賜ふ 在五中将業平朝臣奇拉んとあり 又土人の
姿ハ名つくるもの信し此水ハ
大鏡山南蔵院 砂利場村ハ真言宗ハ大塚の護國
寺ハ属せ 當寺を大鏡山と号ハ昔此寺前ハ大なる池あり鏡
池と唱へ此名あり 橋ハ是 故鷹の頃當寺の垣根を此所ハ又當寺を古俗ハ門寺と興名せ
大樹 頃ハ八所ハ異名とせ 潤山ハ圓乗比丘と号ハ本尊薬師
佛ハ聖徳太子の作ハ立像三尺四寸あり此霊像ハ秀衡の
念持佛なりと養和年間の頃迄ハ奥州平泉にあり
圓乗比丘諸國遊化の時霊夢を感し彼地の農家に
して是を得て此地ハ安置せり本堂外陣ハ掲け
薬師堂三大字の額ハ蓮華光院大僧正道恕の筆
總門の額ハ大鏡山と書せ同し筆あり當寺薬師堂の



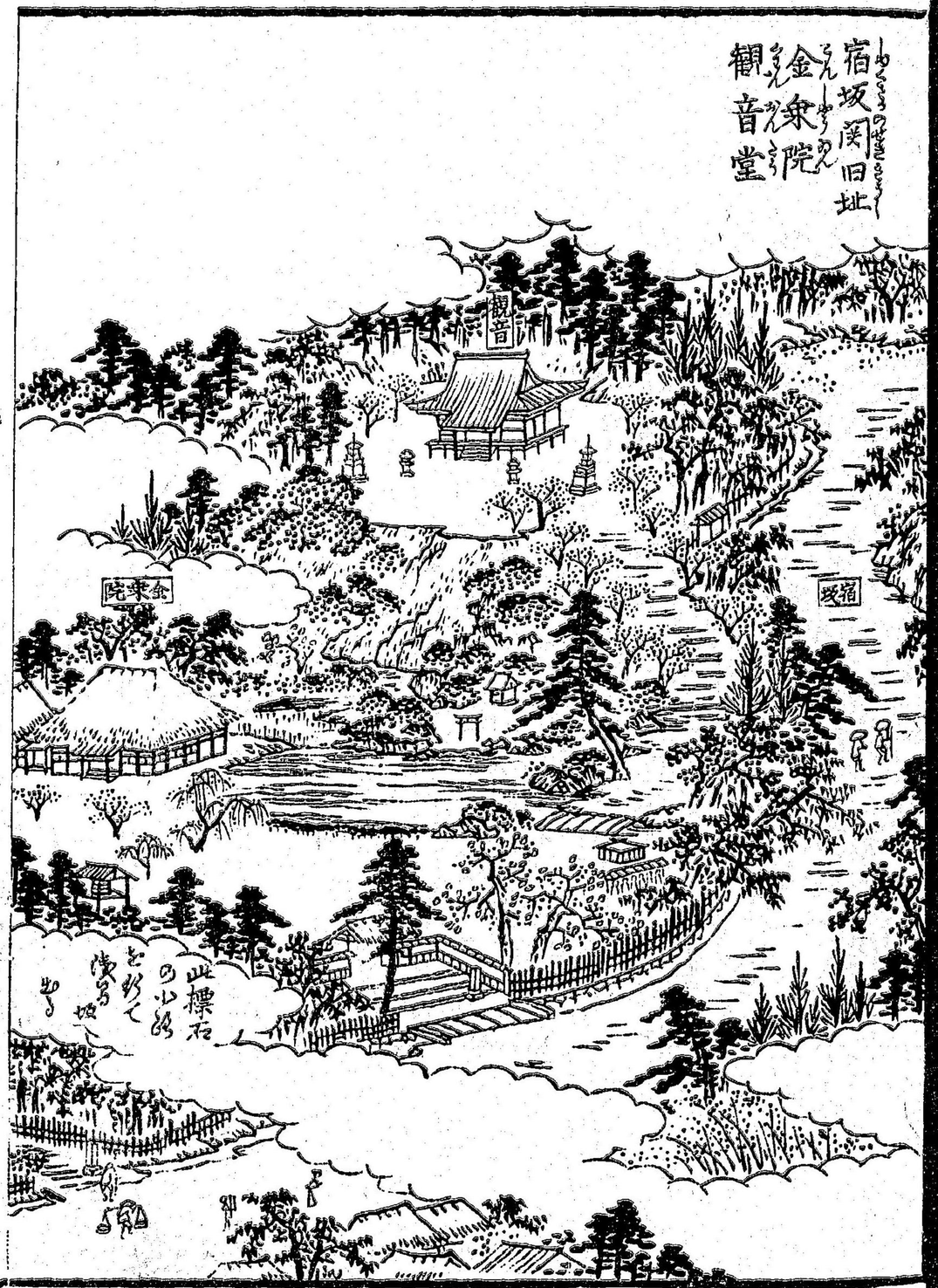
高田

南蔵院

鶯宿梅

氷川社

右搗



後ハ大橋立慶の別荘の旧跡あり寛永の頃ハ
大将軍家度々此ハ入らせ給ひ假の御殿なども
構へ重し給ひ昔ハ此地ハ駕宿梅
大樹数多自栽あり梅樹あり後枯ぬ今ハ亦
此地ハ昔鎌倉街道の通路なりと鎌倉街道の楓樹と号
今その境内ハ存せり

氷川明神社　同寺前道より左よあり下高田村の産土神ハ
しく南蔵院の奉祀なり祭神ハ素盞烏命ハして是を土
俗男躰の宮と称せ落合の氷川明神ハ稲田姫を祭れ女
躰の宮と称し當社を合せて夫婦宮とす
毎歳正月十日祭礼ハ奉射の式あり甚賑ハしく古
雅あり此れ蔵院の川より曳子大黒砂と唱へ産を此砂ハ
水中に住る出の化せる由近江古繁先生の説根志ハ

右橋　南蔵院の前ハ架せ石橋を号く往ハ還るハ右の方ハ
名ハ旧名を藁塚橋と号

氷川明神社　同申酉の方田島橋より北杉林の中にあり祭神奇稲田姫命一座なり是を女躰の宮と稱せり同所菜王院此持なり（高田の氷川明神の祭神素盞嗚婦の宮と土俗あやまつ在原業平二条后の靈を祀る甚非なり）

七曲坂　同所より麓山の方へ上る坂をいう曲折あり名不詳此辺ハ下落合村に属せり

落合土橋　同所坤の方上落合より下落合へ移道に架ル土人云田島橋より一町ばかり上に玉川の流と井頭の池の下流と會流ばかり此方を落合の名あり（按に北条家の而順役帳に奥津加賀守太田新六郎石頭の中に江戸落合の名を称へ長野弥兵衛又鈴木紋の地を頒ちあり神田の上水を助水とし此水道へ玉川の上水落合の名の発る和此両つの上水落合の愛に附きこと知へし憑に未詳なり然るはハ落合の名ハ後世やうく承此地ハ螢の名あり形大にして光りも他に勝れり山城の宇治近江の瀬田にも越て玉の如く又星の如く乱れ飛く光景最奇とも夏月夕涼多し）

奥州橋　同寺の乾の隅に架せ土橋をいう往古の奥州海道ハ水神の社の上通り黒田家の邸園に今も松の列樹あるも其旧跡なりとのへり

宿坂関之旧跡　同北の方金乗院といふる密宗の寺前を四谷町北方へ上る坂口をいう同寺の裏門の辺に絶の平地あり土人云ふ此地ハ昔の奥州街道ハ此地ハ関守の八郎といふ者あり家に門のあり跡ありとのへり（或人云此地ハ関守の八郎といふ者あり家に突棒指股及び道中日記ハを持伝へ土俗八兵衛稲荷或ハ関耶姫稲荷の宮と唱へ）

水花開耶姫社　同所小坂の中腹にあり富士浅間宮の祭神ハ木花開耶姫なれハ浅間

此坂を清玄坂と唱へ按に謬伝せし歟

当社の額木花開耶姫命の六字ハ水戸黄門光國卿の親筆なり今別當金乗院に伝へ

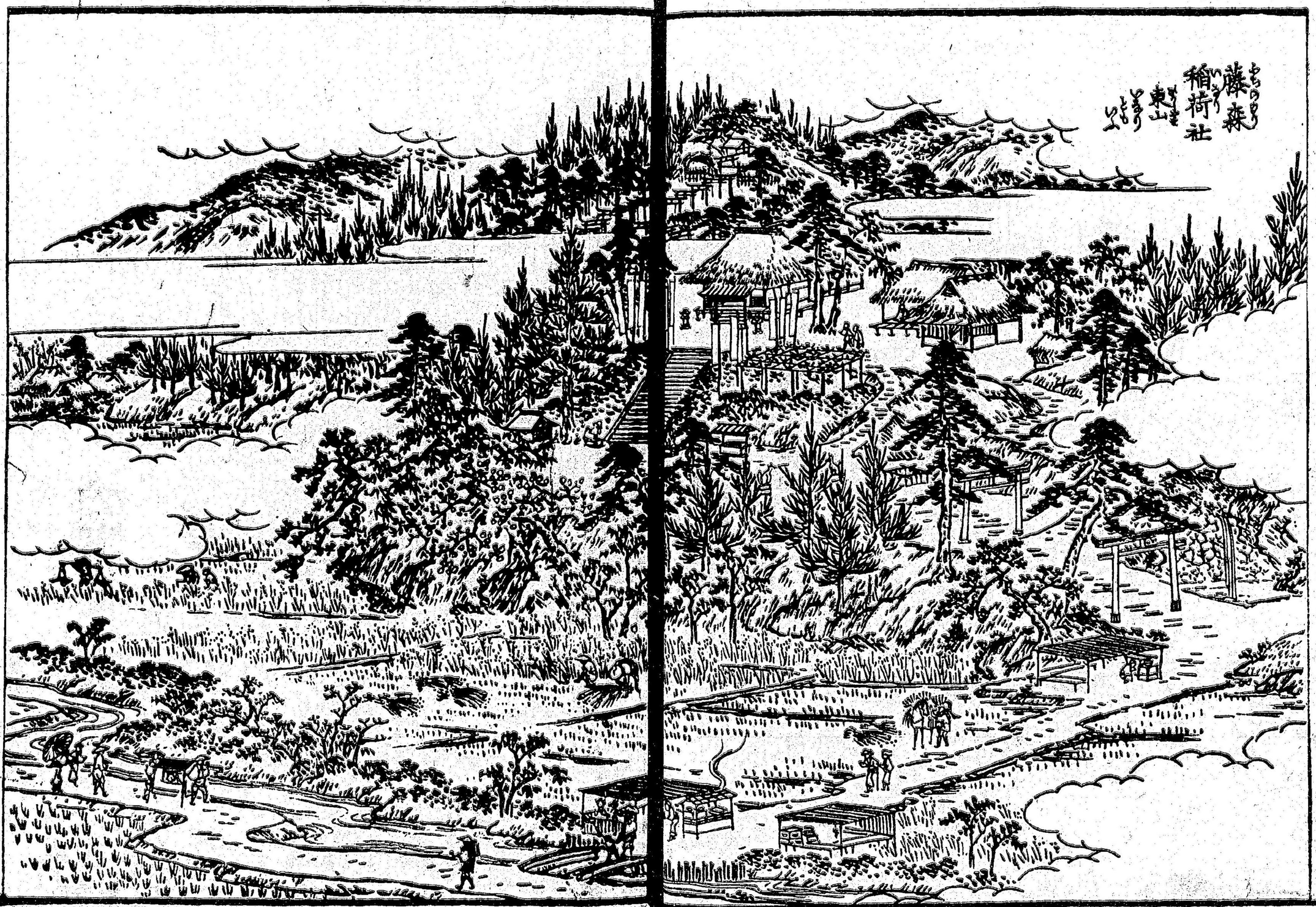
藤杜稲荷社　同所岡の根に傍あり又東山稲荷とも称せり灵験あるとのへり頗恭敬の徒多し落合村の菜王院奉祀を

泰雲寺
古事

黄龍山泰雲寺　同所上落合より黄檗派の禅林なり花洛萬福寺に属せり如意輪観世音の像は天然の石仏なり

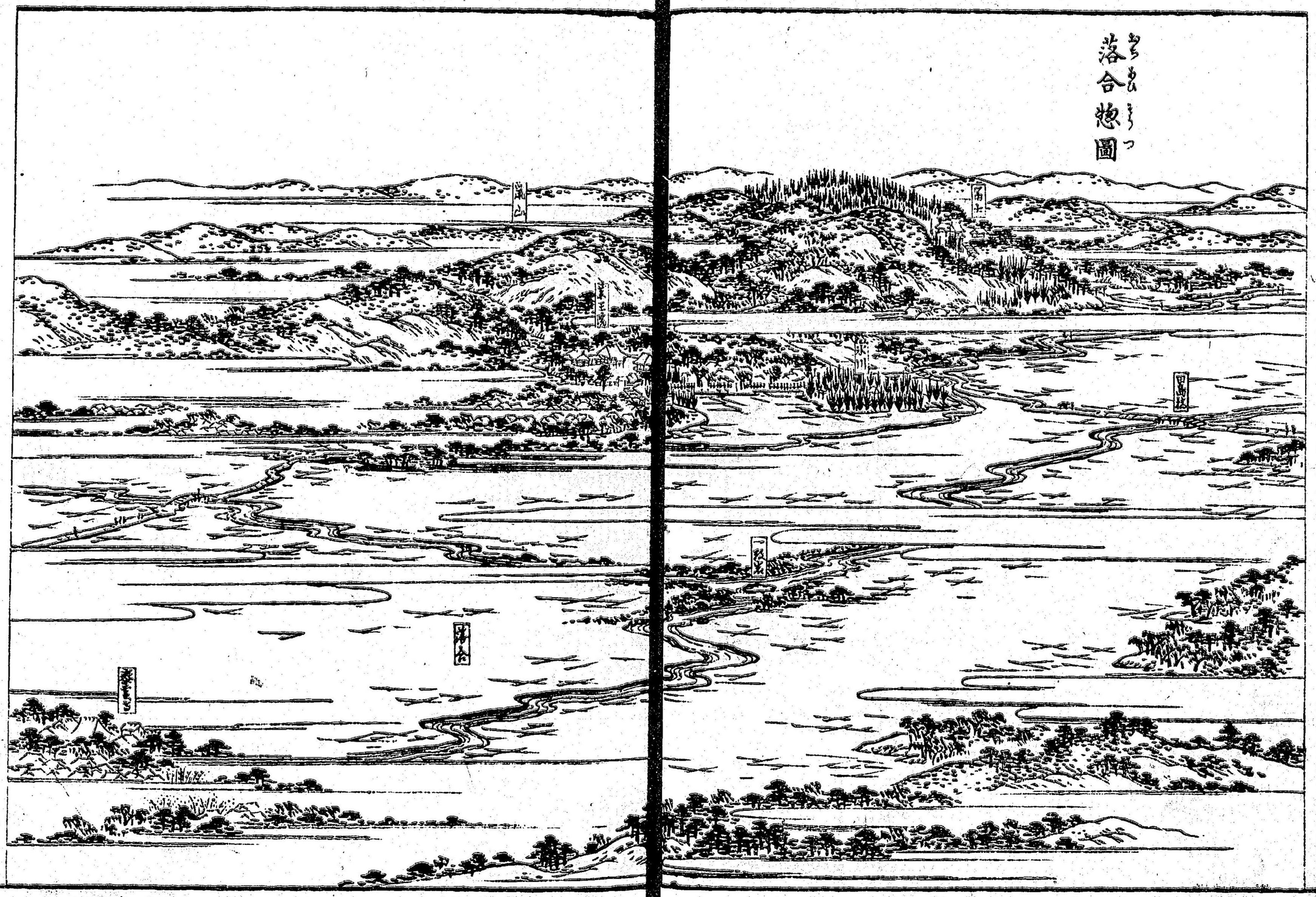
当寺の土中より出現あるものゝ開山は白翁道泰和尚と号し水庵和尚の法嗣なり　二世は了然尼なり後法雲院元光尼（真田氏の妹）東福門院の侍女なり　当寺を奥後一山和尚の師鐵禅和尚（鐵禅和尚の法弟）を中興の開祖とし徳門ふ掲くるの額は泰雲寺とあるなり　黄檗水庵老人の書なり　当寺第二世了然禅尼は泰雲院元總和尚と号し性は葛山氏駿州富士の大宮司葛山十郎義久の子同長次郎なるゝ女なり　長次郎は京師泉涌寺の前ふ閑居し茶事を好み古画を鑒定せり　頃世に画見の長次と称せしとなり　松屋叢話ふ尾張國人とあり又了然は植山氏（江戸砂子ふ了然尼は東福門院ふ仕へ十歳ばかりの儒日の母なりしかり可考）始大内ふ仕へ名を寄生と称し後仕を辞して家ふ帰る　女房なりしか門院薨御の後尼となりて記せり

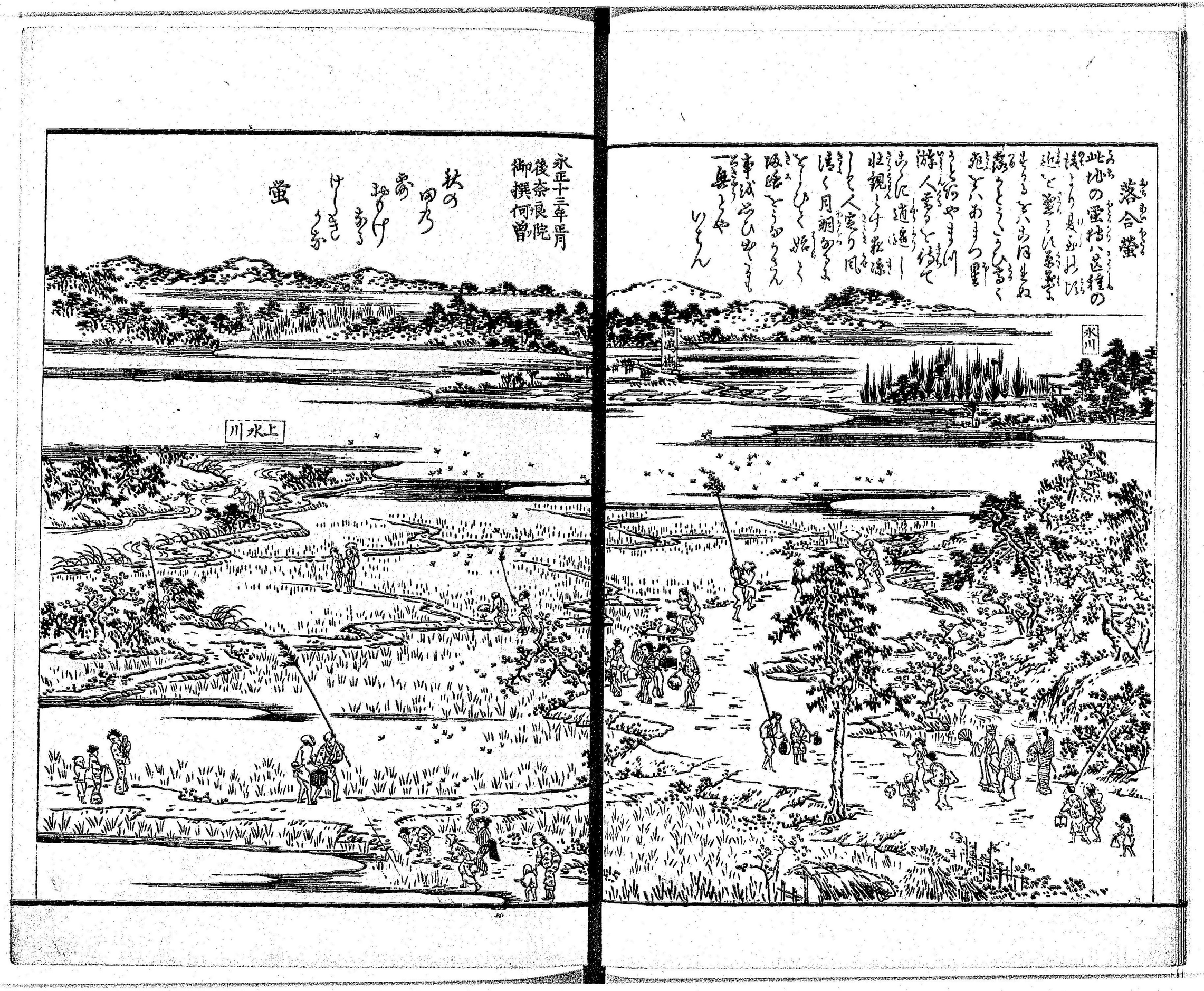
人あつく婚儀を整へ松田何某といふる医生の許ふ嫁せしむ　新著聞集ふ三十余歳の時男女三人の子を産せりと長男後ふ葛山長十郎と


藤森
稲荷社
東山

一枝岩
落合の近傍作田
上水の白堤を
あらく一堆の巨
巖水面に動れ
藍水巖頭に
砕れて飛瀑を
此水流ふ鳥居ヶ
瀬犀ヶ淵寺
ヶ原小名峯
此をこそ
月の名所
秋夜
出題

落合惣圖




永正十三年月
後奈良院
御撰何曽
秋の
田乃
穂
ひ
ま
な
く
ま
ち
て
ま
ち
ま
ち
に
な
る
ら
ん
蛍
上水川
落合螢
此地の螢は八色種の
樣に見えれば
遠と螢とは異
なる
水川
内嶋橋

名つく林家の門人中博覧の後夫れ告く難深く臨淵黄檗等は
諸禅林に入り紀州亜相に改る
下り白翁和尚に見え法を求んとせしに新著聞集に白翁和尚井上大和侯の許にあり
紫の一衲中に白翁和尚ハ水庵の徒弟和尚平美貌なるを以て許
やしく頃駒込に住れしとあり
依て了然尼火攪を焼く自ら面皮を焦をこふ於て和尚も
尼の懇志を感し大法残なく附与せしる時頃を賦し
和歌を詠ス

昔遊宮裡焼蘭麝　今入禅林燃面皮
四序流行更無跡　不知誰是菌中移
（又如此上リ）

後大悟し晩年に至り当寺を草創せ白翁和尚化寂の
後遺骨を当寺に収め石塔を営を建く自ら銘文を製し
和尚を〻く当寺の始祖と称ス白翁和尚の肖像ハ知るの左に
あり右に了然の像を置く

自ら二代と称せり（頃ハ尼寺なりと云ハ当寺の前にあり江戸鹿子に比丘尼搞ハ竟に正徳
元年辛卯九月十八日既寂せ（当寺に石塔を築く新著聞集に江戸近き
号ス又江戸砂子に了然尼市谷の来に尼寺を開創し自ら精舎を建立し一乗院と
建る寺の額も此尼の筆跡なりとあり共に違へり稽考〻〻）

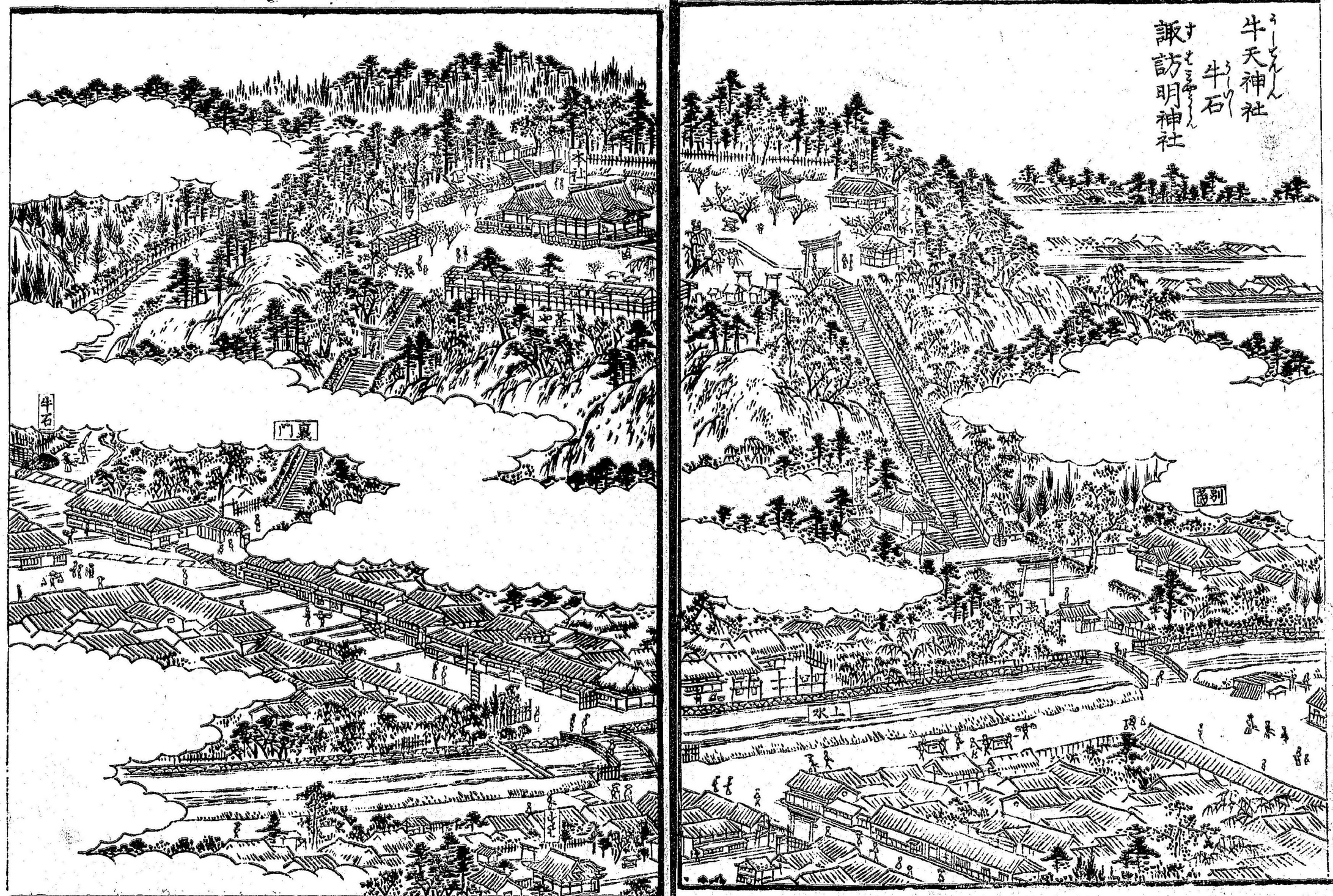
開山白翁道泰和尚墓
開山師翁者本寺第二代賜紫水庵老和尚嫡子也
宗説共通機用殺活孤危嶮峻不可湊泊一朝因事
辞三州竹篦山嘉遁武陵大休庵未幾羅病書偈坐
化実天和二壬戌年七月初三日也總等不堪悲歎
如法茶毘但恨無開山所因伸辞誠於官家終蒙
許可再興廢院改黄龍山叢雲禅寺以為開山鼻祖
奉酬法類之恩之令也建骨塔遺萬世皆室永八年
卯年七月初三日

當山第二代傳法弟子了然元總百拝識

蘭臺井先生之墓　同卯塔の中にあり井上氏名通熙字子叔
嘉歎と称を岡山侯の儒臣〻〻

牛天神社　小石川上水堀の端にあり一に金杉天神とも称を此地を
金杉と唱ふよりく号く金杉古ハ金曽木と作る小田原北条家
の条下に詳合せ所頃役帳に此地名を注せり金剛
泉松山龍門寺と号ク神躰
別当ハ天台宗に〻〻

牛天神社
牛石
諏訪明神社



菅神自ら彫造し給ふとて佛長六寸あり　当社の旧地ハ社地より東の方今水府君の邸中より入る神木

船繋松も同所にありと云　社壇ハ収む鎌倉佛師運慶の作なりとの人社古大猷公

降魔狗　社壇ハ収む鎌倉佛師運慶の作なりとの人社古大猷公

禁闕より遷し奉りて讃州の大守頼常君当社崇敬厚く元禄五年壬申社

郷より賜ふ　後水戸黄門光圀

壇重修の頃寄附　鳥居の額ハ頼常君寄附あり

華表　額　天満宮　近衛内大臣家熙公筆

牛石　裏門坂の下り口隅の方巨石なり名つく次の社記の条下ハ

詳　南向亭云く頼朝公の腰掛石なりと云

社記云往古寿永元年壬辰の春右大将頼朝卿東國追討の

時此所の入江の松ハ船を繋ぎ和波を待つ　此辺上古ハ入江也今の飯田町の東

入堀のあり　又同所ハ蛎売坂抔ありしも入江なり　牛天神の外の坂を綱干坂と　其間夢ハ

菅神牛ハ乗し　頼朝卿ハ二つの幸あるを小し武運満

足の後ハ必小社を営み報ぜんと記し　頼朝卿爰覚る後

傍を顧るに一の盤石あり夢中菅神乗し給ふ牛ハ

髣髴依て是を奇異とせんに果して同年の秋頼家卿

誕生あり又翌年癸巳の夏ハ動ぶく平家悉く敗しハ其報

賽とし元暦元年甲辰此所神を此地ハ勧請あり神領等

寄附あり云云　又江戸名勝志に草紙ハ北条氏康兵を起し頃夢中ハ菅神牛ハ乗し降臨あり後此地ハ天満

宮を勧請なし　家康遠山丹波守当社を修営せり上の社記ハ

諏訪明神社　同所上水堀より南の方諏訪町ハあり　祭神ハ健御名

方命なり　相伝ハ明徳元年庚午牛天神の別當梅本坊乗観

法印霊告あるより勧請なると云云　土人云此地旧名を忍

ぶの森と云とのり　梅本坊ハ今の竜門寺是なり　祭礼ハ毎歳正月と七月の廿七日なり

慧日山金剛寺　同所上水堀の端ハあり曹洞の禅刹なり

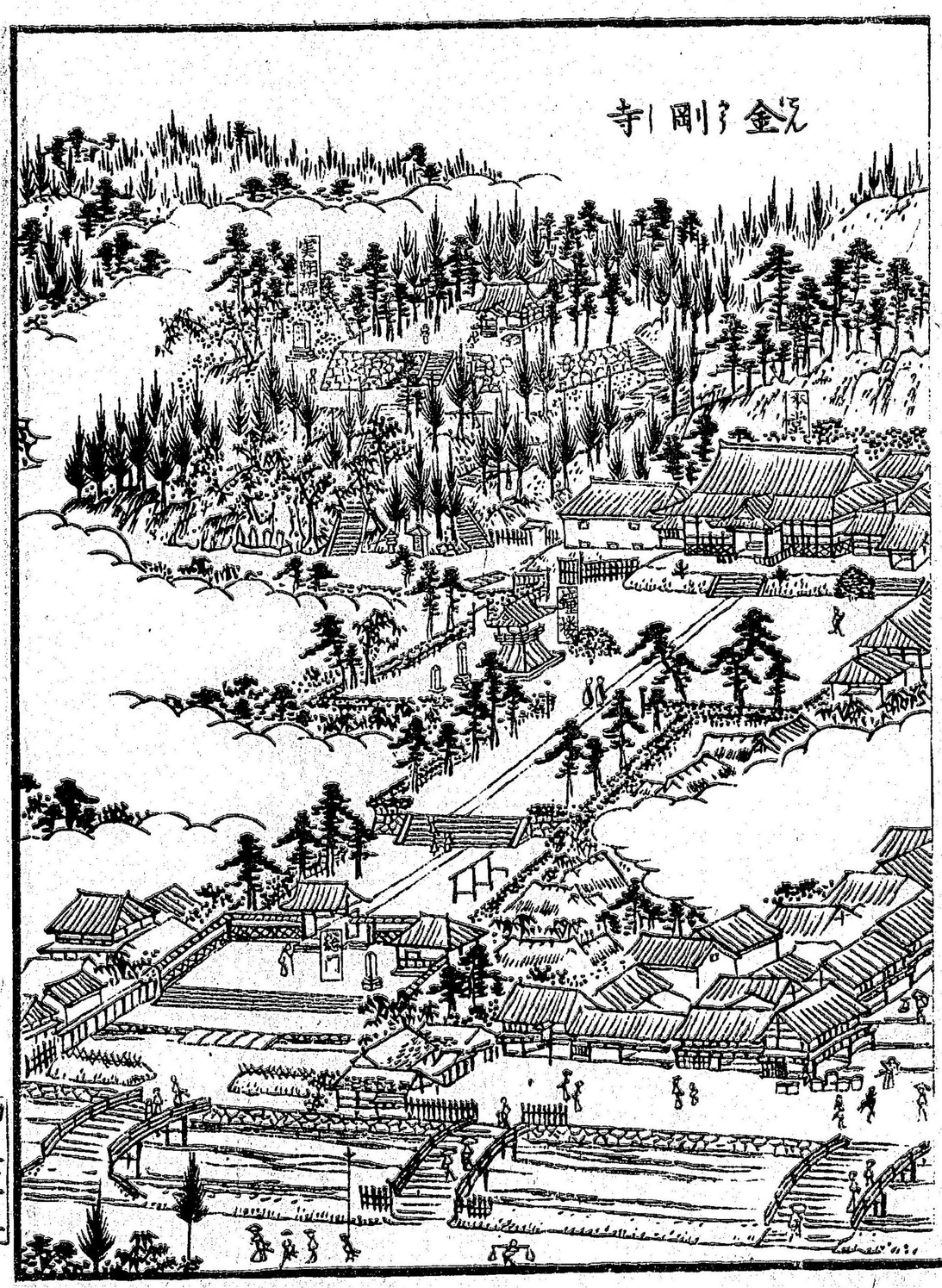
吉祥寺ハ属せり　昔ハ臨済宗なり永正六年己巳曹洞宗ハ改る　水ハ釋迦如来開山を

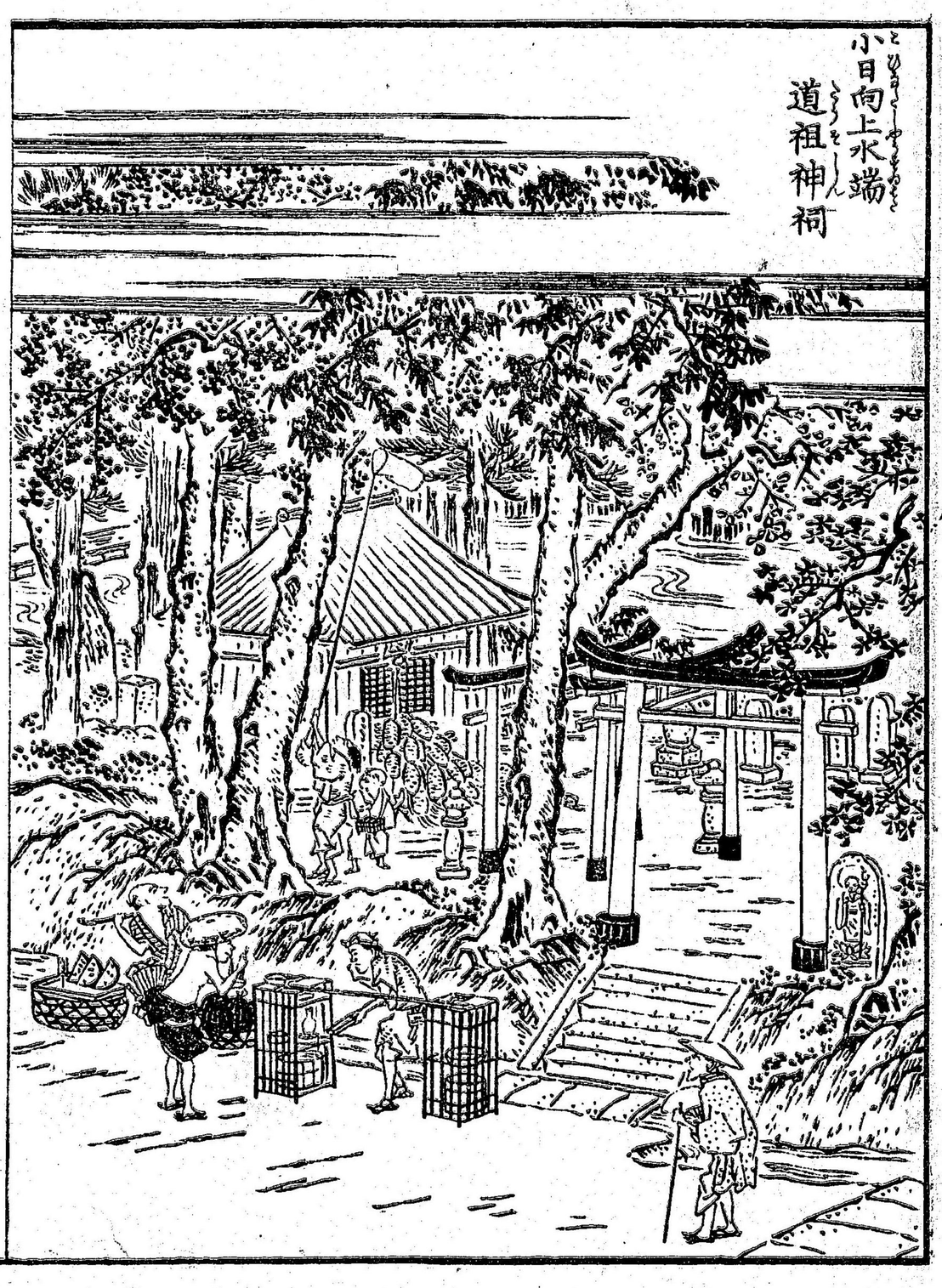
天目忠峯普應國師中興ハ用山和尚なり

鎌倉右府将軍實朝公碑　後山の半腹ハ永正の頃造立碑あり其碑面ハ聽しと云く

恵日山金剛禅寺者始波多野中務忠経為鎌倉右府将軍實朝公菩提建長二庚戌年建立相州波多

氷川明神社
法本寺
此邑米田上水


金剛寺



野荘田原村後江戸下野入道道心移寺於武州江戸荘小日向郷金杉村亦其後文明年中太田左衛門入道静勝軒春苑道灌重興焉昔日者臨済宗也其時之開山普應國師二代巨舟和尚中興叔悅禅師永正六巳巳年改曹洞宗者也維時永正十癸酉年七月十日金剛現住比丘實山叟記之

金剛寺殿鎌倉右府將軍實朝公大禅定門

兼久元己卯年正月二十七日

地蔵堂同し山の頂よりあり天竺佛ハ頼朝鎌倉円覚寺より後ハ安置あり後金剛寺と共に此地より彼地より移し置を実朝公の時波多野より一宇を建立あり

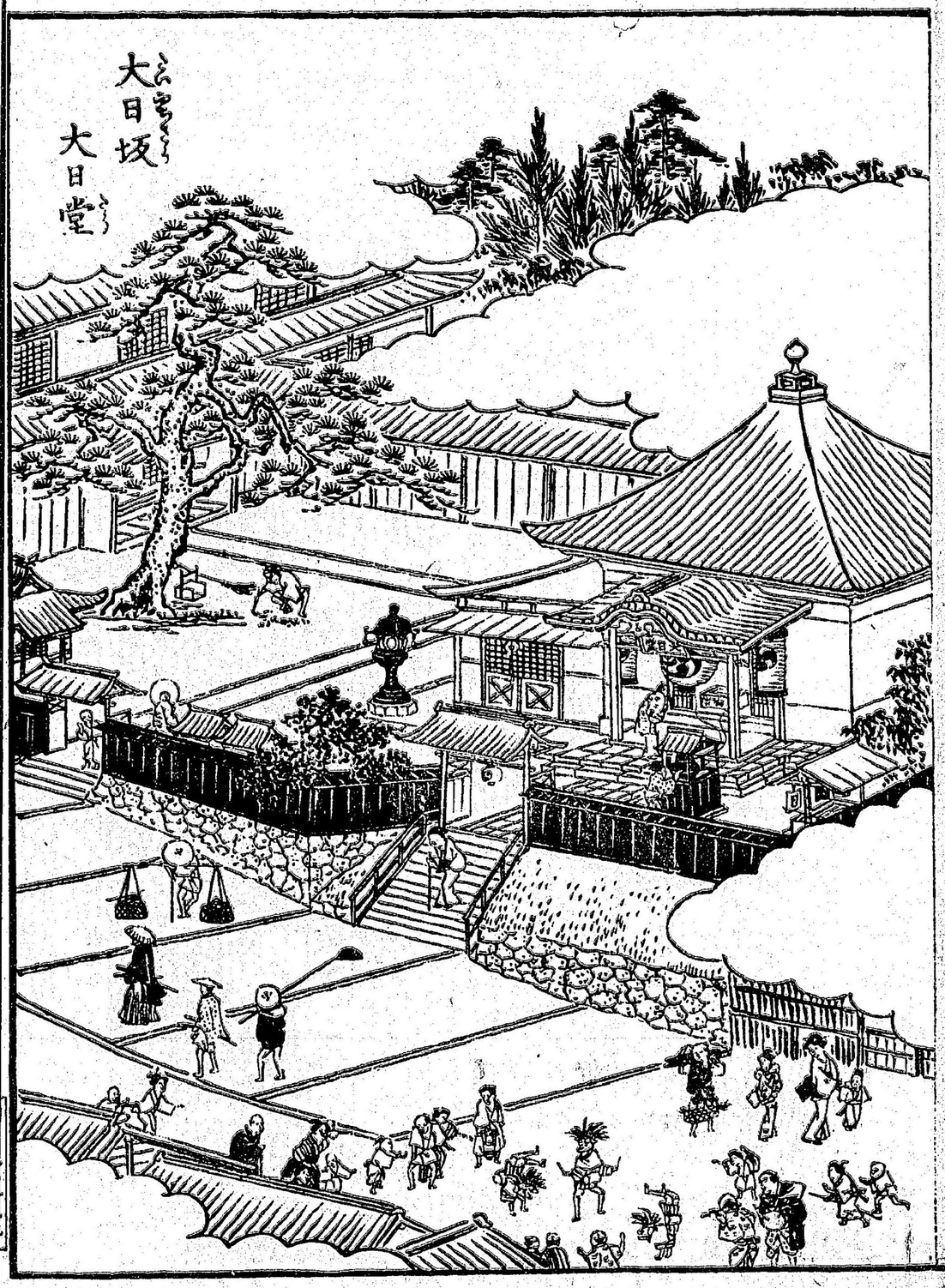
當寺ハ波多野中務忠經東鑑ハ中務丞忠經と云名あり諸家系図ハ波多野中務丞従五位下忠經改ハ忠経より鎌倉將軍實朝公の菩提を弔ひ為建長二年庚戌相州波多野荘田原邑に造立せしの精舎ハ後江戸下野入道心佛今の地に迁せしと又文明年間太田道灌當寺を重修し叔悅禅師を招き住持せしむ

ハ道灌の伯父故ハ實朝公及び道灌の霊牌ありしと云云

梅花無尽蔵傳長老の注に叔悅禅師肖像等を置

總門の額に慧日山と書せしハ黄檗即非の筆なり

白石先生式梅花無尽蔵



大日坂

大日堂

文明十七年乙巳東遊の詩の注に芳林院に歩く李太白の墨蹟を看る同く其下に芳林院今金剛寺と号ふ とあり

按に北条家の統限帳に島津孫四郎北品川小石川及び金曽木内法林院

金剛寺等の地を領せる記し法林院に作る又小田原実記に

大永四年正月十三月北条氏綱上杉修理の太夫朝興と戦ひ勝て江戸の城に

入る条下に其頃當所芳林院の孤舟和尚来て萬里居士の江亭記を

捧ると孤舟和尚後に金剛院に住せしと記せり こゝに因て考へれば

金剛寺と法林院は別る

當寺往古は境内廣く寺院巍々として首座主閣侍者沙弥喝

食維那納所行者火番あり祈請上堂参禅の式勤り怠

らずして堂塔も壮麗なりしとあり

道祖神祠　同上水堀の端金剛寺より二町ばかり西にあり　明徳

年間の勧請なりとて別當竜門寺に當社勧請の碑と称

するものあり

氷川明神祠　同西の方二丁餘を隔て是も上水堀の端慈照山

日輪寺なる禅林にあり祭神は當國一宮に同し　勧請の始久

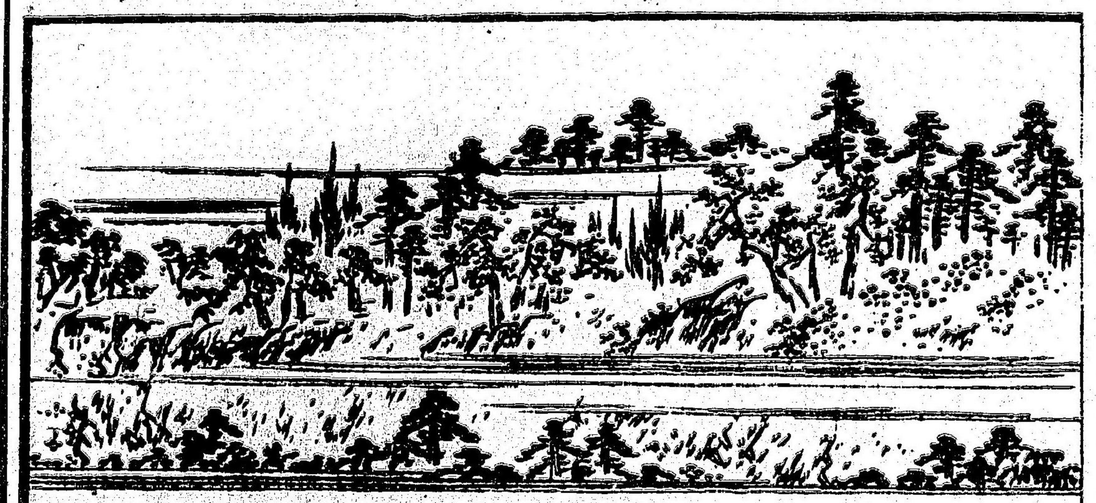
しからず中古太田道灌の再興なり小日向の鎮守

なり祭礼ハ正五九月の十七日なり（当社ハ元亀の年号ある庚申待供養の古碑あり）

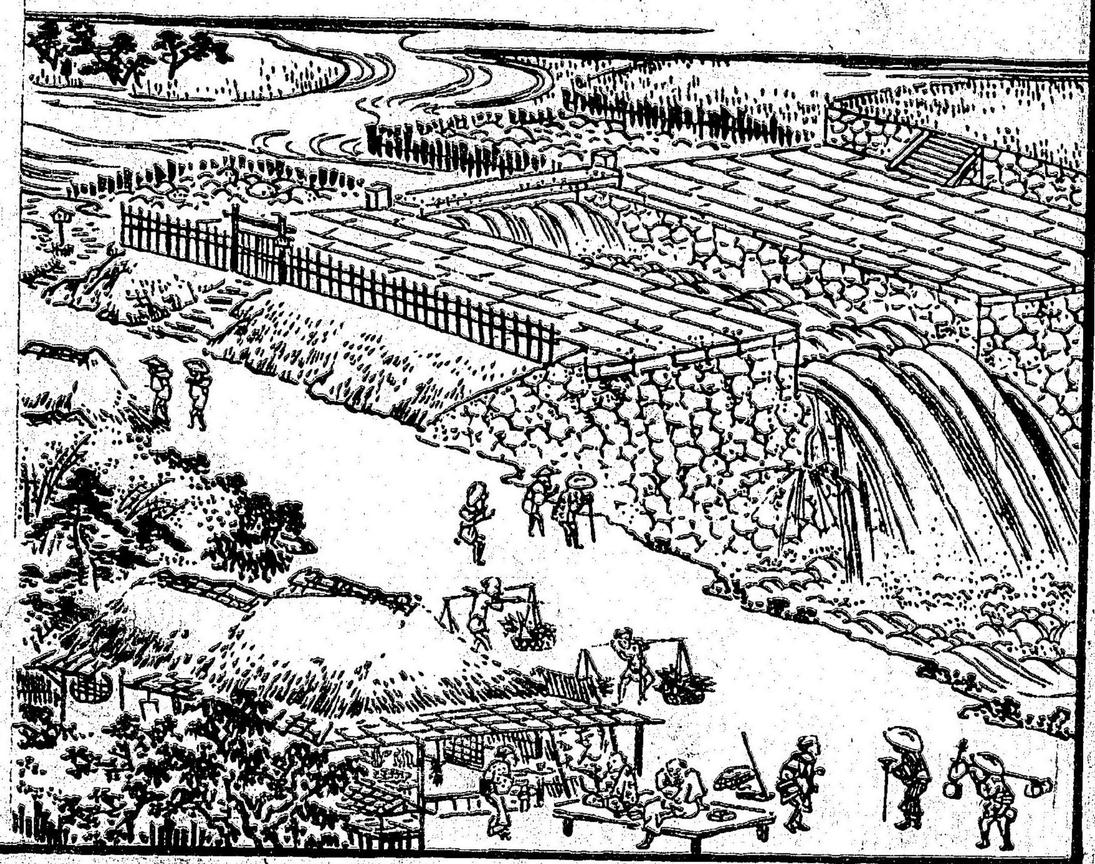
大日堂　同西の方大日坂ハあり天台宗ハ覚王山妙足院と号し相伝ハ本尊大日如来ハ慈覚大師唐より携来ると和の霊像なり往古ハ叡山の中ハ安置ありしを元亀年間織田信長公門を襲ふ頃堂宇悉く兵火ハ罹りて灰燼となれと此年尊ハ火焔を遁れ出近江國兵主明神の社頭深林の中に移し人手後夜く瑞光を放ちのよりく藤原氏某感得しく其家ハ移しまつりせ旦暮供養ハ怠りなし然ハ此人嗣子なきを憂へと此ハ祈求しく竟ハ一女子を儀く長ふ及んて紀伊亜相頼宣卿ハ仕へまつり後落飾して法善尼と号し此尼霊夢を感しの後当寺を闢きたに安置しまつりしとなり

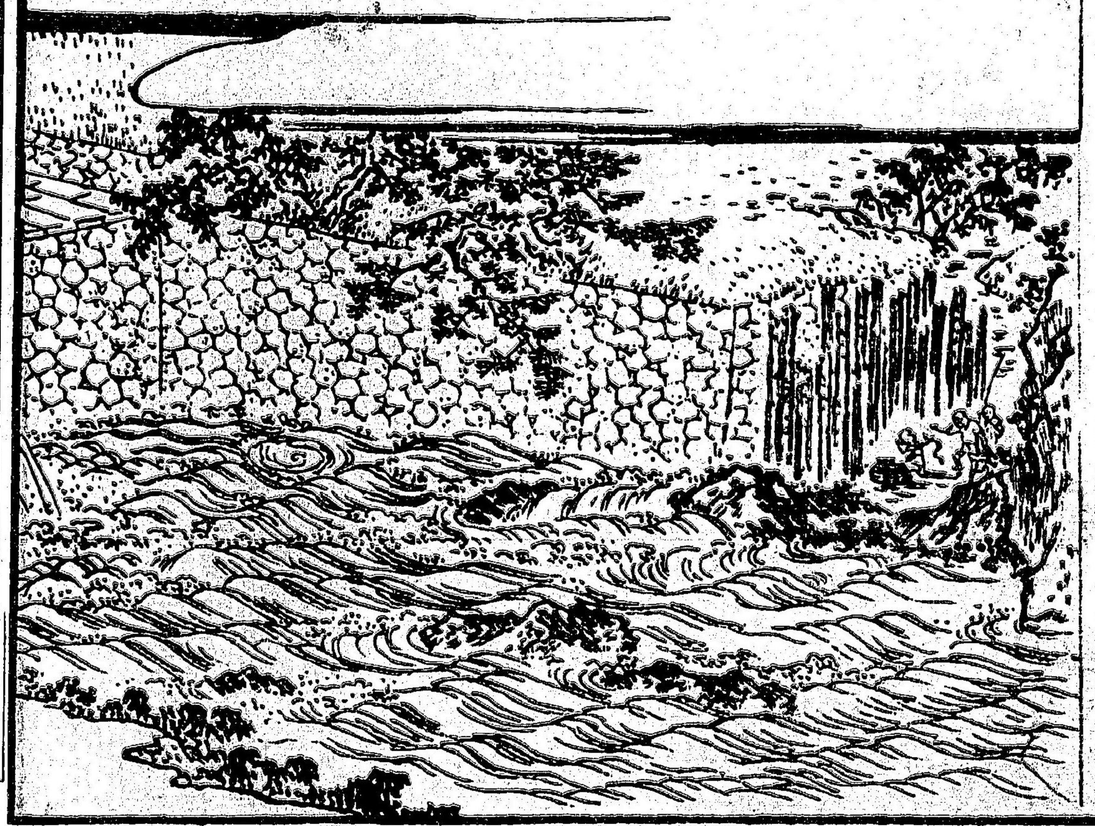
大洗堰　目白の渥下ハあり兼應年間　最命ハより当國多磨郡牟礼邑井頭の池水を引く江戸大城の下ハ通せしむ其頃此地ハ堰を築せられ上水の餘水を分らく天明六年丙午の洪水ハ堰崩れるふ故く再ひ堅固ハ築せられ古より壹尺ばかり其高を減せ故ハ水嵩時も其上を越く流れ落ふ損る患なしとなり

龍隠庵　同所上水堀の端ハあり昔ハ真言宗ハ安楽寺と号く故ありく元禄十年丁丑黄檗宗ハ改め洞霊寺の持となり（洞霊寺ハ音羽町八丁目の西の裏ハあり）平石和尚住持ハ本ると正観世音慈覚大師の彫造とて庵の前ハ上水の流れ横ふり南ハ早稲田の耕田を望み西ハ芙蓉の白峯を顧る東ハ堰口ハ水音冷々とく禅心を澄しめ後ハ目白の臺聳へ月の夕雪朝の風光も又佳なり背上水開発の頃芭蕉翁（芭蕉翁通称松尾甚七郎と甚七郎此上水堀割の時藤堂家へ曹請のと命せられ藤堂家の士なり此地ハ明頃此地ハ明く遊



目白下大洗堰





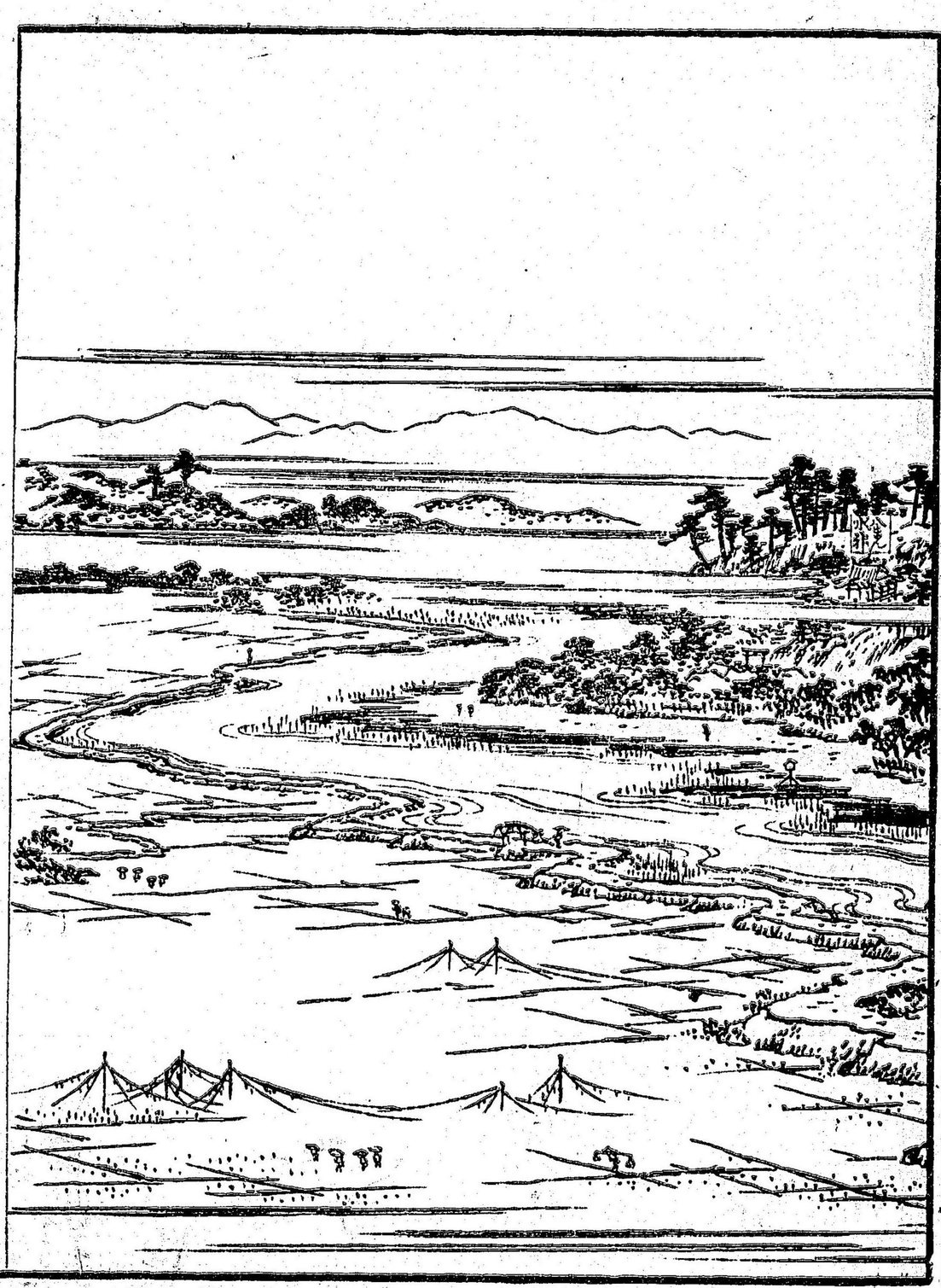
芭蕉庵

五月雨塚

駒留橋

八幡宮

水神宮



此地ハ遊ぶ人ゆゑ後世其旧跡を失ふことを歎き白兎園宗瑞及ひ馬光なとゝる俳師此地の光景江州瀬田に義仲寺ハ髪髢ゝとして五月雨に隠れぬるのよ淋しの稿とゝる翁の短冊を塚ハ蔡き五月雨塚と号ス

水神社　同所ハ並ハ龍隠庵別當ゝ上水の守護神を祀る為ハ北辰妙見大菩薩を安置を祭神ハ岡象女なり祭礼を

五月十五日あり

八幡宮　同社地あり往古よりの鎮座とゝ下の宮と称ゝ椿山八幡とも称せり　昔ハ椿多うゝ椿山と号くと云祭礼ハ毎歳八月十五日上の宮と隔年ハ修行を洞雲寺奉祀を

駒留橋　竜隠庵の前上水の流ハ架を此水流ハ神田に上水なれと玉川の分水の落合ゆゝく山吹の里ハ傍く流る故ハ弱とあく狂ふもん山ハのもの弱ゝハ弱の玉川とゝる古詠の意をもて号けるとも又里謡ハ右大将頼朝卿此地ハ陣せられ頃雪の朝此川ハ渡ハを駒ハ打乗りく眺望あゝろ奥ハ尽く此橋の辺より帰るゝより駒留橋と号くとも詳なゝ　同所幸神の社記ハ駒留橋のすあり此橋を云なゝ獵其祭下を

拾穂軒北村季吟翁別荘旧地　同所目白の臺松平大炊庚の庭中に ありとゝハ山の井と称るとの今ハ埋もく名のゝを存せり

俳書ハ増山の井とゝあり　此翁此地ハ閑居ありて著述なりゝ故ハ此名ありとも此辺時鳥の名所ゆゝく外よりも早ゝとゝり　按ハ別荘の事を隠儀荘とゝ

羅ハ別荘を求めゝ

住つゝ家宿とゝハ時るとゝあゝく　季吟

幸神祠　同所東の方道を隔て右側ハあり一ハ道山の幸神或ハ駒塚社とも号く祭神猿田彦大神なり庚申の日を以く縁日とも社司ハ宮城島氏なり相伝ハ往昔此所ハ豪民

道山幸神社

あり　今も此辺を長者の駒と云　金の駒を塚ふ築竈榎樹を栽くかゝふ幸神を勧請す　当社の神体ハ昔此麓入江なり　頃其水中より出現あり　今社殿の前甘泉あり　古へ此辺鎌倉海道なりし　故ふ道山の号あり　そ中古大ふ荒廃し　神木の榎の下ふ絶の叢祠のみ存せしを頃の神主政泰なる者今の祠を営み建るとの〻　里諺ふ云延宝の頃金の駒の精あり　此辺の田畑を荒す　里民是を数度追ふ時ハ山谷ふ隠る其谷を駒谷と唱ふ　又槁の上ふ其駒の形方を留槁を駒槁といふ

目白不動堂　同所東の方ふあり　堰口の涯ふ臨む　真言宗中山東豊山新長谷寺と号ス　長谷小池坊の末寺　本尊不動明王の霊像を長八弘法大師の作　徳門の額東豊山の三大字ハ南岳悦山の筆ス　縁起云弘法大師唐より帰朝の後羽州湯殿山ふ参竈あり　一時大日如来忽然と不動明王の姿ふ変現し　滝の下ふ現れ大師ふ告て云く此地ハ諸仏内證秘密の浄土なれハ有為の猛火を故ふ凡夫登山せ今汝ふ無漏の上火をあ〻ふ

早秋遊豊山
長谷寺偶然
成詠
偶乘秋景入山林
盡日曾無俗叟侵
巖下清流堪濯熱
況傾河朔酒杯深
春臺
料理や
鐘楼
門表

目白
不動堂
境内眺望
勝れたる
雪景色
高田
別邊
本堂
門表

乃ちと宣ひ持しかの利剣をもつて左の臂を切るに霊火盛に燃出て佛身を充たす依て大師面前に出現の像二軀を摸刻し一躰は同國荒澤に安置し一躰は大師自ら護持なしまつる後野州足利に住せる沙門某是を感得しく奉持せしむ一年霊感あるを以て此地の住人松村氏某に命じ竟に一宇を開かり此本尊を移し安置なしまつる

往古松村氏夢を感し不動明王を野州より此地に移し奉り頃門其途中嵐の為に吹倒れ有り此の製裝當山の榎の枝に有り依て石見守某へ此地を乞ひ仕せ緣の地藤邨の地を寄附あり渡辺石見守某へ地主渡辺石見守某へ此地を乞ひ仕せ則此製裝掛榎と称せり今の境内是なり

名とせり

當寺は元和四年和州長谷小池坊秀筆僧正中奥あり一頃大將軍台德公の嚴命により堂塔坊舍を建立あり和州長谷寺の本尊と同木同作の十一面觀世音の像をうつし新長谷寺と改む　大將軍大猷公目白の号を賜ひ元禄の始に八

桂昌一位尼公御帰依浅からず諸堂修理を加へ給ひ丈余の地蔵尊を安置なしめられり此地麓に堰口の流を帯ひ水流深くとこしへに日夜に絶せず早稲田の村落高田の森林を望み風光の地なり境内貨食亭多く行旅も涯に臨り

開口八幡宮　堰口目白坂の半服左側にあり神躰は佛工春日の作なりとかや當社を上の宮と称せ下の宮は来る開口水道町鎮守に祭礼は隔年八月十五日に修行せ當社も下の宮に同しく

洞雲寺奉祀なり

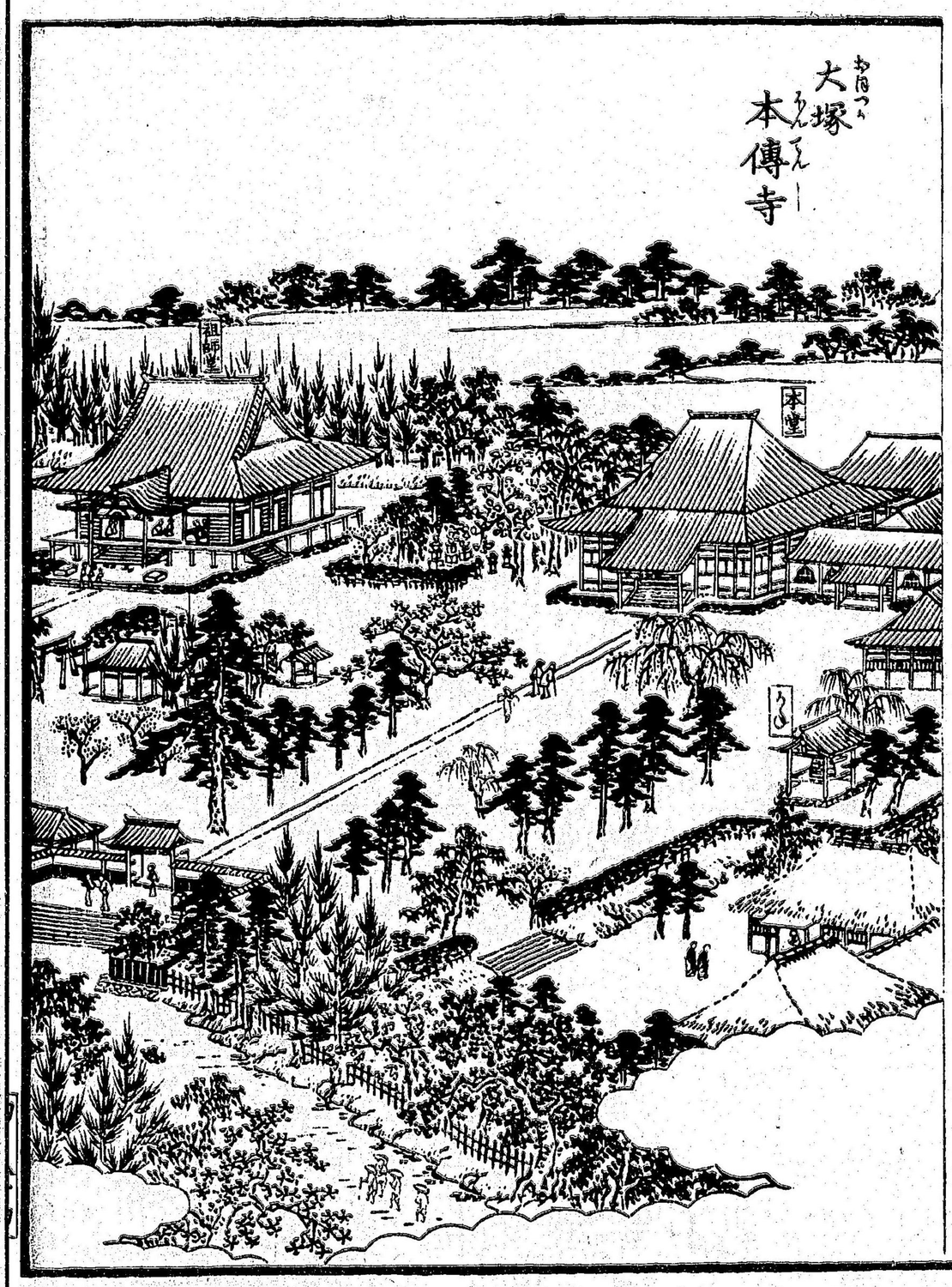
大塚　小石川原町の辺より護國寺の辺迄の惣名なり　或人云古へは大塚の地東西に分つ甚廣莫の地なりしが雜声或人云今の水戸大学校の藩邨古の奥州街道なり榎木の大樹あるは頃の一里塚なり本傳寺日蓮大士縁起に云く又南向亭云く則大塚と云は是なりと大塚の地昔は富士見塚と称せり

安藤對馬侯の東の方森川氏の構の中に一堆の塚あるを以て

とも紫の一なる塚の上ゝ不動堂ありとなれハ今の波切不動ゝ
地大塚と称せる旧跡ゝ相伝ふ太田道灌相図の狼煙を揚る
料ゝ築ゝる塚なり故ゝ昔ハ太田塚と唱へるゝ或ハ又鎌倉勢軍
守邦親王乱をゝこゝ武州比企郡大塚村ゝ逃去せ其廟を王
塚と称せゝふ大塚と号ゝも此類なるんとゝも詳ゝ

江戸の内ゝ大塚の名称多し牧可考

大法山本傳寺　大塚町横小路ゝあり日蓮宗ゆゝく駿州蓮
永寺ゝ属せ昔ハ禅宗ゆゝく重光山善性寺と号く元和年
間瑞應禅師今の宗風ゝ改し自の名を法仙院日行と改め
寺号をも本傳寺とす
経讃日蓮大士　縁起云く往古當寺中興開山日行上人始
瑞應禅師と称せし頃蓮師の宗義を鑑ミ覺悟の要路ハ法
花ゝ限るゝを發明し宗風を相せんとゝもさゝふ心決し


おおつか
大塚
ぐんえん
本傳寺
祖師堂
本堂

かゝし依元和三年丁巳四月三七日の間不動明王の室前に
おいて法花三昧の行を修し給ふ同廿五日結願の夜の夢に
明王姿を現し師に告げて云く汝前生に法花の行者たりし
も臨終の期に至て唯空永滅の念を起こしし謗執に
因て空無の見に墮ちしも今宿世の妙種あるに本
心に帰り速に権宗を捨て実教に入へし我も久しく
妙法の醍醐味をあまんせんるを願ふ正に今一乗の法
蓮を開うんとまるの時至れり社壇の艮に當て基を開く
べし地必妙経讀誦の霊音あり不測の像を感得す
へしと云く師終に此霊夢に依て心を決し同廿八日日蓮上人に
謁して受戒し号を日行と改む（日蓮上人は駿州貞松山心性院の寺主なり）又霊示に
任せ同年六月一宇を開うんとして其地を卜せしに同十三日の
夜土中忽然として妙経讀誦の霊音あり翌朝を待て地を
穿つに数尺果して此霊像を得たり（此不動を世に波切不動と称せり次の条下に）一宇の香堂を営て是を安置せんと云云 此霊像何人の作
頃日行上人一百日の間法花懺法を修し給ふ霊像師の夢に告て曰く汝宿
縁深厚なり下総へ趣き一堂を建て我を奉安せよ此地不動の堂
前に一人の信士あり明王の告あり我を奉安し教化を受て師檀の
約を結ぶべし別に不隔むの堂前の松樹に我像を彫造して彼信士に
拠与せり汝感得せる所の像を則これなり示し給へと示し給へり竟に大士の手刻
波切不動尊 同所大塚町の通を道より右に入り別當八日蓮宗通
玄院と号す
縁起云此本尊は始勢州一志郡に播州大乗寺に安置あり然に
建長五年の春日蓮上人伊勢路を過ぎ給ふ霖雨ゆく宮川の
水まさりしかば渡を失ひ給ふ時に一老翁来て云く
師川を渡らんとおもへば我れ水を切の術あり汝則師を誘
ひ給へ水上を渡し給ふ（此故に波切の号あり）大士是を奇
と翁の住所を尋ぬに小幡の山寺に住せるとのこと

波切不動堂

へく失去りて大士夫より彼寺を翁に知人
さしたるに依く寺僧より其故を告く彼西を立出の後寺
僧此すを不審より其寺より安置の不動を拝せるに
佛躰水に濡のゝ依大に驚き直に明王を負ひ奉り宗祖の
跡を慕ひ来せられとも手紙方を尋ねに平後狂東國に趣
きしに本尊の霊示あるを以く此大塚の辺に移しまつる農
民其塚上松樹の下に一宇の草堂を営建しく是を安置し
奉りしとなり

普門山大慈寺　同所上町より京師五山の禅刹ゆしく花洛
東福寺に属せ開山は勅諡佛知大通國師　観應二年辛卯五月廿五日寂中興へ
萬古昔大禅師と号せ　四月十日化寂也　暦應二年癸巳　開基は刑部卿の局なり
天寿院殿の侍女中しく法号を大慈寺殿仙林栄寿禅尼といふ　慶長四年八十
餘歳にして逝す則當寺に墓碑あり　碑銘は　最命にしく品川東海寺
の澤庵和尚撰

水尊葵正観世音菩薩　座像長三寸あり　南天竺毘首羯磨又は唐の
誓文會誓首勲の作なり
鎮守日吉豊國両社　社人内藤氏奉祀す
造酒地蔵　寺境見耕庵の本尊ゆしく天竺佛なり
原北条家の頃品川の海底より出現あり　後御當家に浄信敬厚く當寺
大潮哲禪師住寺の頃葵正観世音像を建立ありて　寺記云此霊
撥しに　光明堂原彦葵の家へ此かを賜せられる　其頃或夜佛告曰く　像は往古小田
正法千歳在佛在世　像法十歳遊龍宮海
末法中救此界衆生　今世後世令離苦悩　最命にしく称せ
しに　又造酒の二字を額に　造酒の二字も
祈願あるものを必酒を捧げる　當寺に納あり今も
縁起云葵正観世音菩薩は昔時行教律師天竺より携来せ
霊像なり　欽明天皇已来敬しく右大将頼朝卿及ひ足利
家より信しく夫より後代くの　将軍家崇信厚しく中古
日向國志布施の龍興山大慈寺より其後又花洛東福寺の

支院三好山長慶寺の本尊を
東照大神君に崇敬ましく竟に江戸の大城へ迂座なりしを
毎月十八日天下泰平北に祈祷とし観音懺法を修せしめ
らるる殊更葵の一字をも附しめひ天壽院殿も信心浅
からずしてふり慶安二年當寺を創しめひ刑部卿の局を開
基とされ此かるを當寺に移しかつ
と引く創基なしかつ山号を下されて天寿院殿に喜捨の祠堂料を
附せられしとなり

當寺日向國志布施の竜奥山大慈寺

鳩巣室先生之墓　同所坂下町の北の裏少し北に西の上にあり傍に

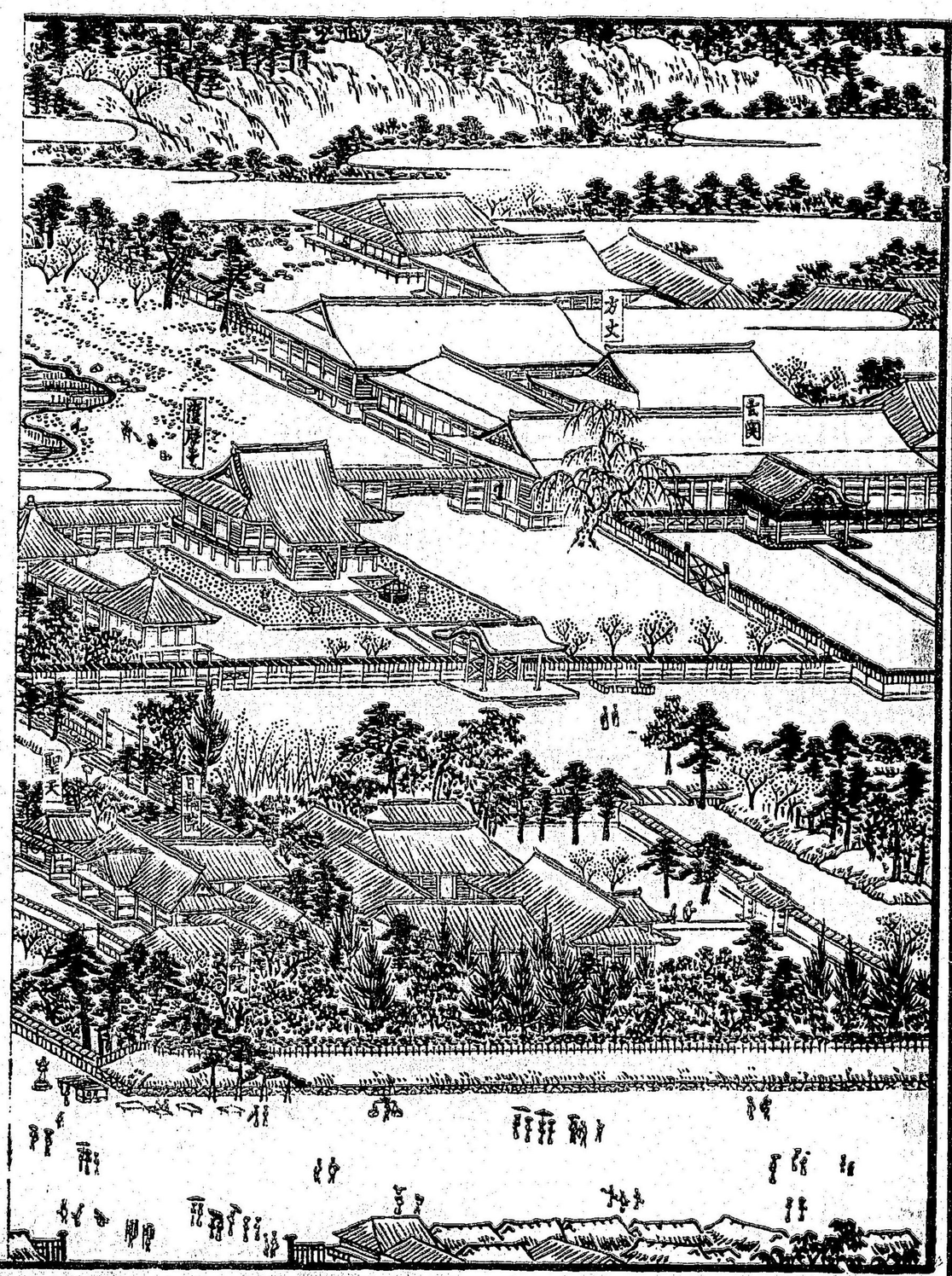
息男忠三郎洪謨の墓もあり

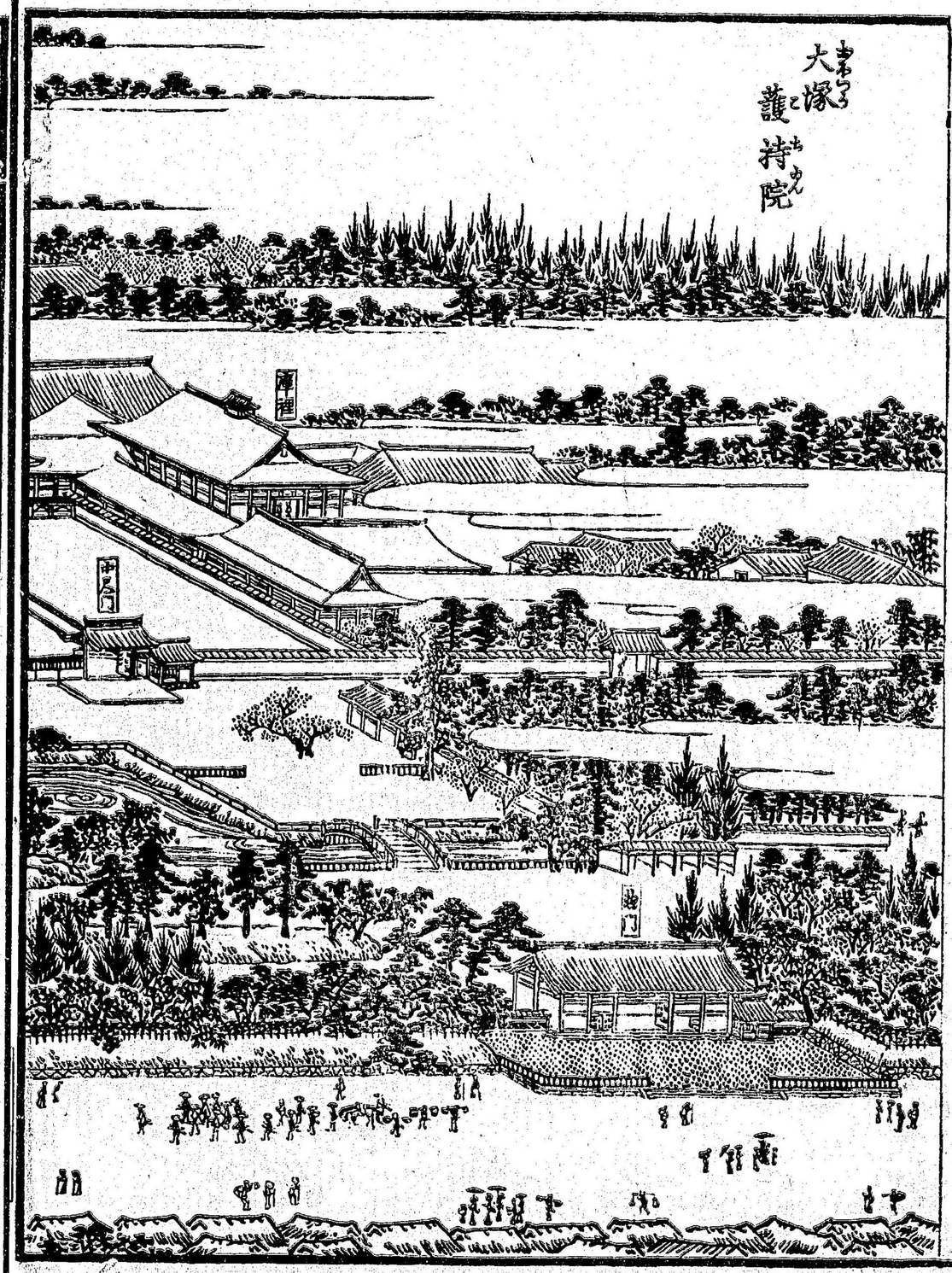
先生姓八室氏諱八直清字八師禮鳩巣と号せ通称八新助斎を命し静倹
其先熊谷直実の裔に備中國英賀郡に出つ考諱八玄樸草庵と号し
北八平野氏萬治元年戊戌江戸谷中邑に産す異質あり髫齔人に絶せ加藩に入て
宮仕し業を木下順菴先生の門に受け京師に客寄し討論の暇大学新疏を著し以て
章句の蘊を発し德元年東臺の微に應し来て江府に就く往復増益の什積て
業装を成せ應對流暢大東振古に以て大東文明の美を耀し
邦國治平の盛を聲し其風海表に播し是を垂範に宣し足
有德公に説を徒し後特に先生を撰び當中侍講を授く此職の設蓋此先生に
始る嘗て鈞旨を奉し五倫五常の名義を疏記し國字を以て書成し
是を載せ又六論行義大意を述し官命に是を鏤め天下に布せ是より先論孟
中庸及ひ易経廣義を著せ考訂に及ぶ先生災に罹り疾を
感し重ねて稿を屬せ者再三優命に猶職名を帯し家居し頤養を以て
病に耽し駿臺雑話を著す旨あり是を徴せ因て以て嘉せ又大極図述を著し
偏を成し瀛洲千載の秘を弘闡し後学を来世に俟此乃先生の絶学なり享保
十九年甲寅八月十二日駿臺の賜第に卒せ年七十八州の豊島郡大塚里に葬る
以上鳩巣文集前編伊東貞薫氏の叙述に拠り其要を摘し記す

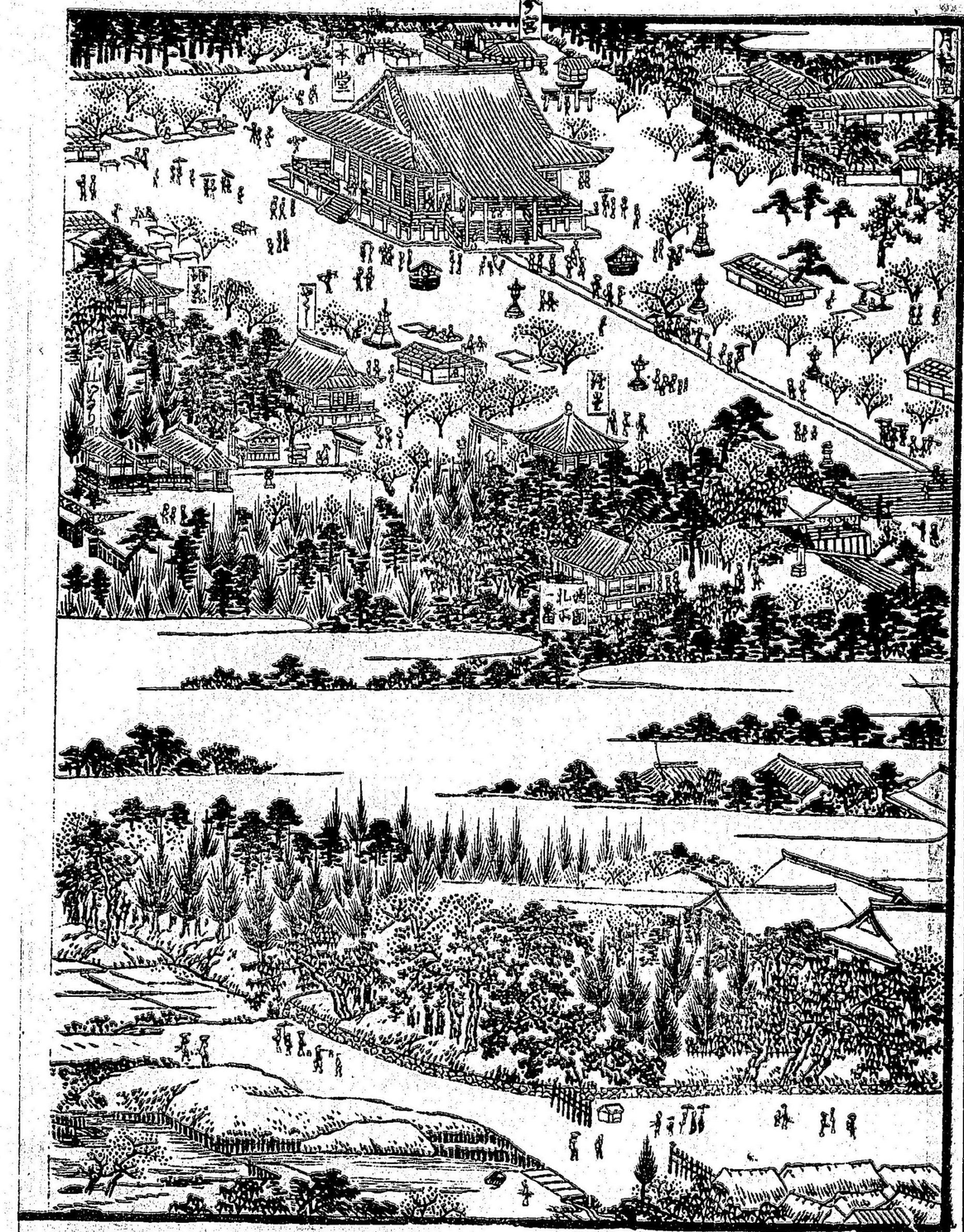
筑波山護持院　音羽町の北にあり真言宗にして和州長谷の

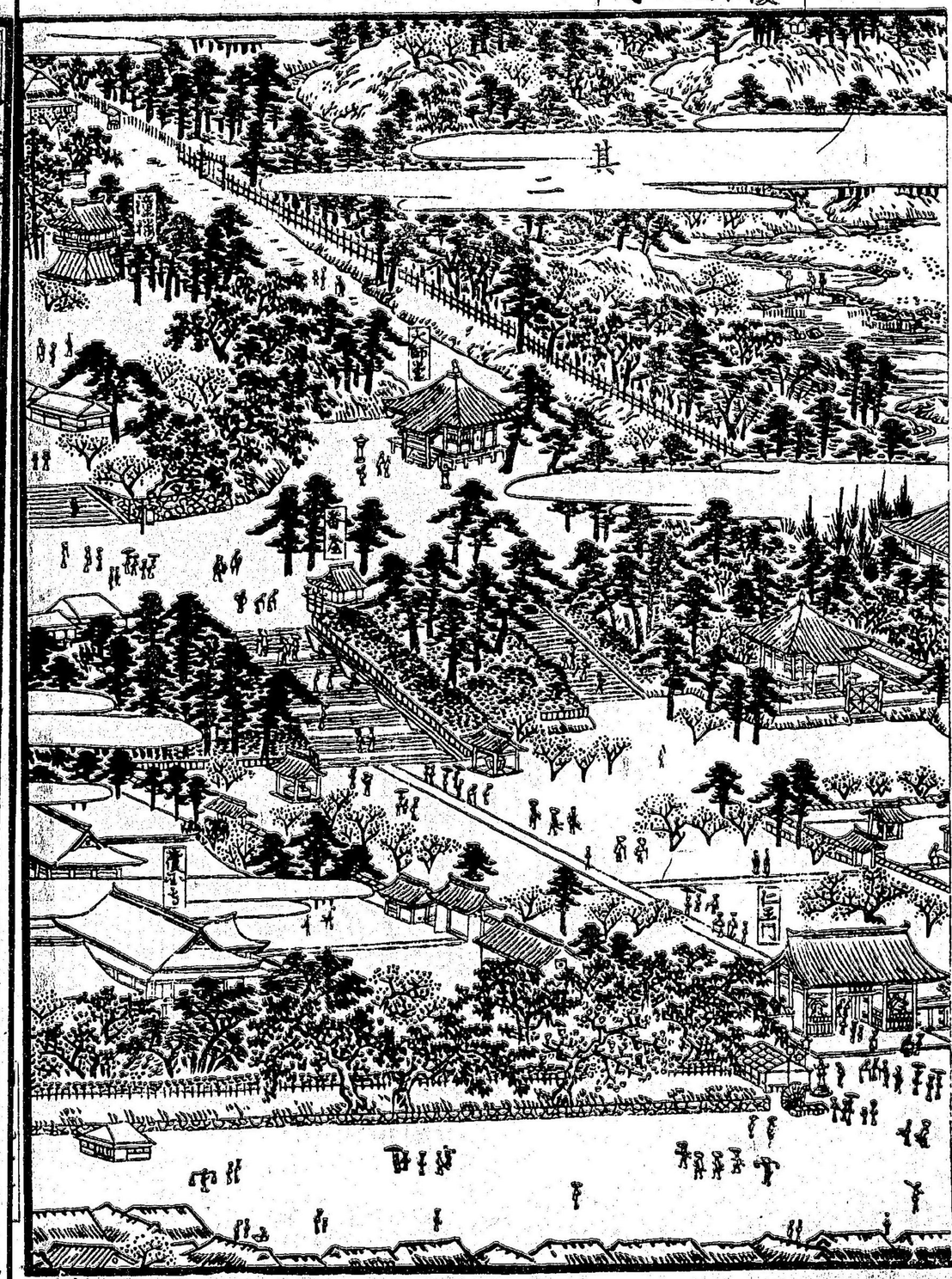
一汎なり寺領千有五百石を附せられ
本堂本尊不動明王　作不詳往古八如来に
歓喜天　同右に蟹の池　庭前の池なり當寺建立の時八此地の名を
権現山　後園に安置し自ら岳と唱へしと昔此山に祭所の像ありしと
當寺開祖権僧正光誉八和州初瀬寺の西蔵院に住職あり東照大神君に正真の御尊像を
に髮を植
に帰依浅からず江府に召れ常州筑波山の宿寺を下し
則知足院と号す　其始知足院宥俊八下野國筑波山中善寺を兼

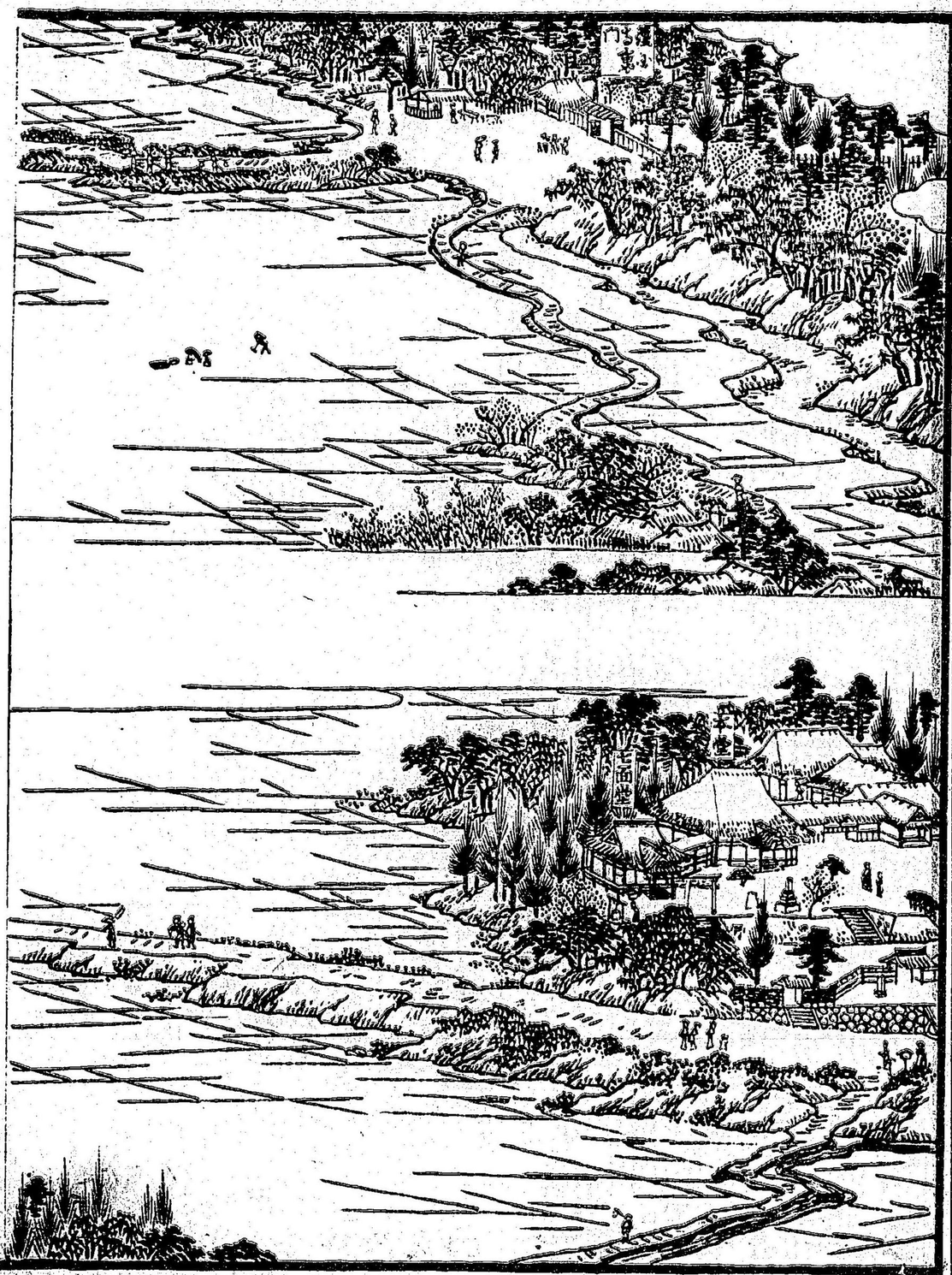
帯し真言新義四箇寺の支配をうけ慶長の始　大神君の
厳命を蒙り江城の護持所と定させられ同庚戌の年江戸
銀町に寺院をのこ（其地来考九軒町の）依光誉知足院を建し　営建を同
癸亥年大坂御陣の頃も光誉命を受て御陣中に於て祈
禱を其後寛永三年丙寅　大猷公諸伽藍御建立あり
延宝二甲寅年　有廟御再修あり　天和五年壬戌十二月
火災に罹るよりて貞享元年甲子湯島切通に移しのこ（今の）
根生院の地なり　憲廟御帰依浅からず元禄任元の年神田橋外
武士屋敷の地に移され松平若狭守仙石越前守に命せられ
護摩堂祖師堂観音堂経堂灌頂堂鐘楼堂二天門坊舎に
至迄金銀をちりばめ隆光を開山とし権僧正に任せらる又
護持堂に建立あり釋迦佛を安せらる同四年八月寺領千五
百石を附しひ院家に列し関東新義惣録とせらる色衣
免許の宣旨当院より沙汰をうけ命しのこ同五年壬申十二月十二日
覚鍐上人贈官の時に及ひ隆光改任し大僧正に昇進し同九年
元禄山護持院の号を賜り護摩堂の額護持院の三大字を
大樹自灑筆なりしのこ弘法大師自作の真像は濃州大野郡實
相院と云真言寺にありしを取寄られ祖師堂に安置せしむ
観音堂の本尊は　有廟御信敬の仏宝護佛なり大僧正隆光
の願により宝永四年丁亥二月廿五日退隠し駿河臺に
迂し成満院と号し依護國寺住持快意僧正を後住と
御成あらせ繁昌先のあり　宝永六年己丑八月六日隆光願に
より大和國に帰る故に成満院の跡快意に仍て美に隠
居す後住は知積院小池房住職たらせ命あらせ入院す
然に享保二年丁酉正月廿二日火災あらせ堂塔一宇も不残焼
失しられ頃住持退隠の願により夫より浅寺号及ひ食禄

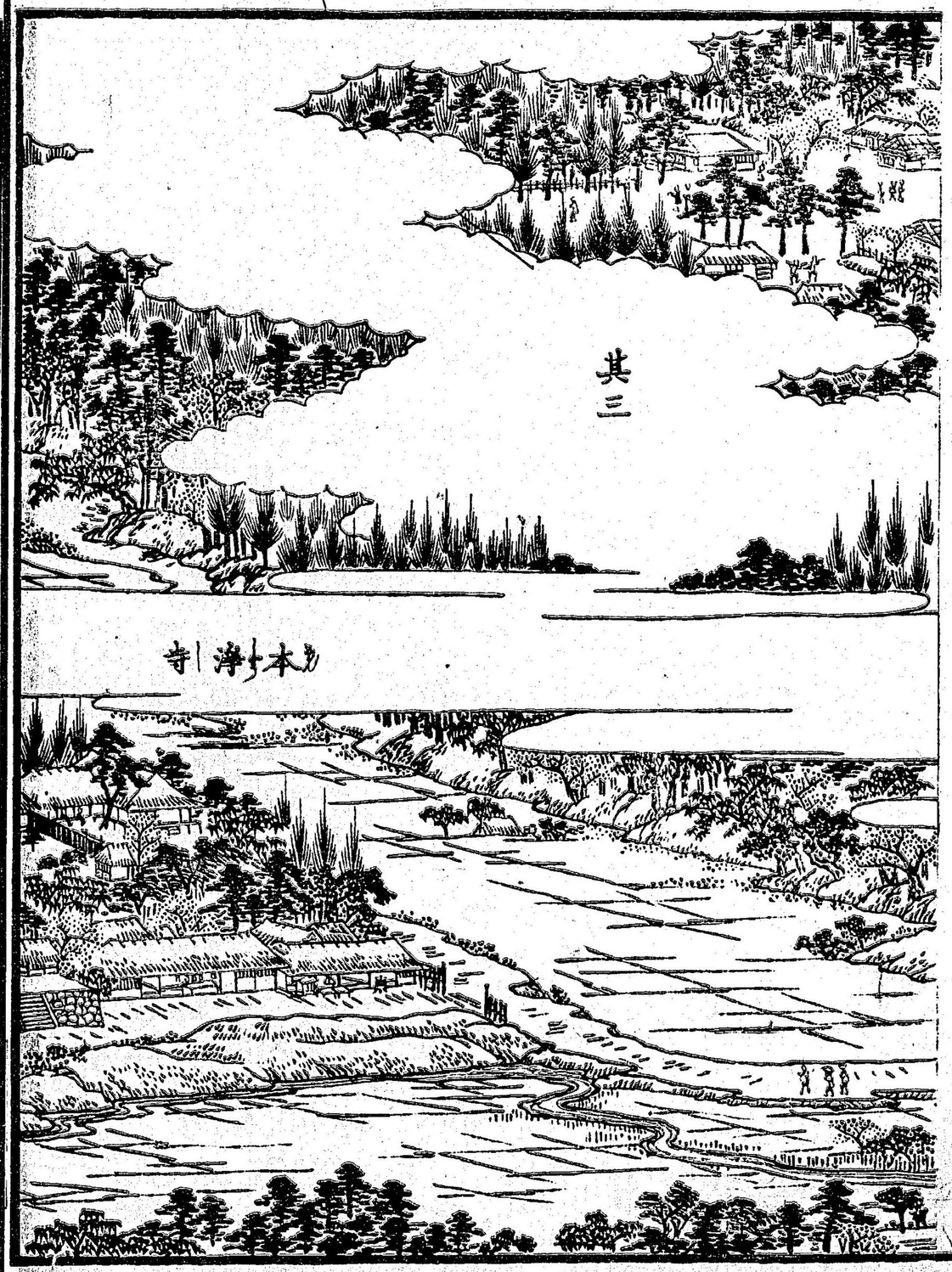

方丈
玄関
護摩堂


東京大塚護持院
庫裡
中門


本堂
月輪宮
鐘楼

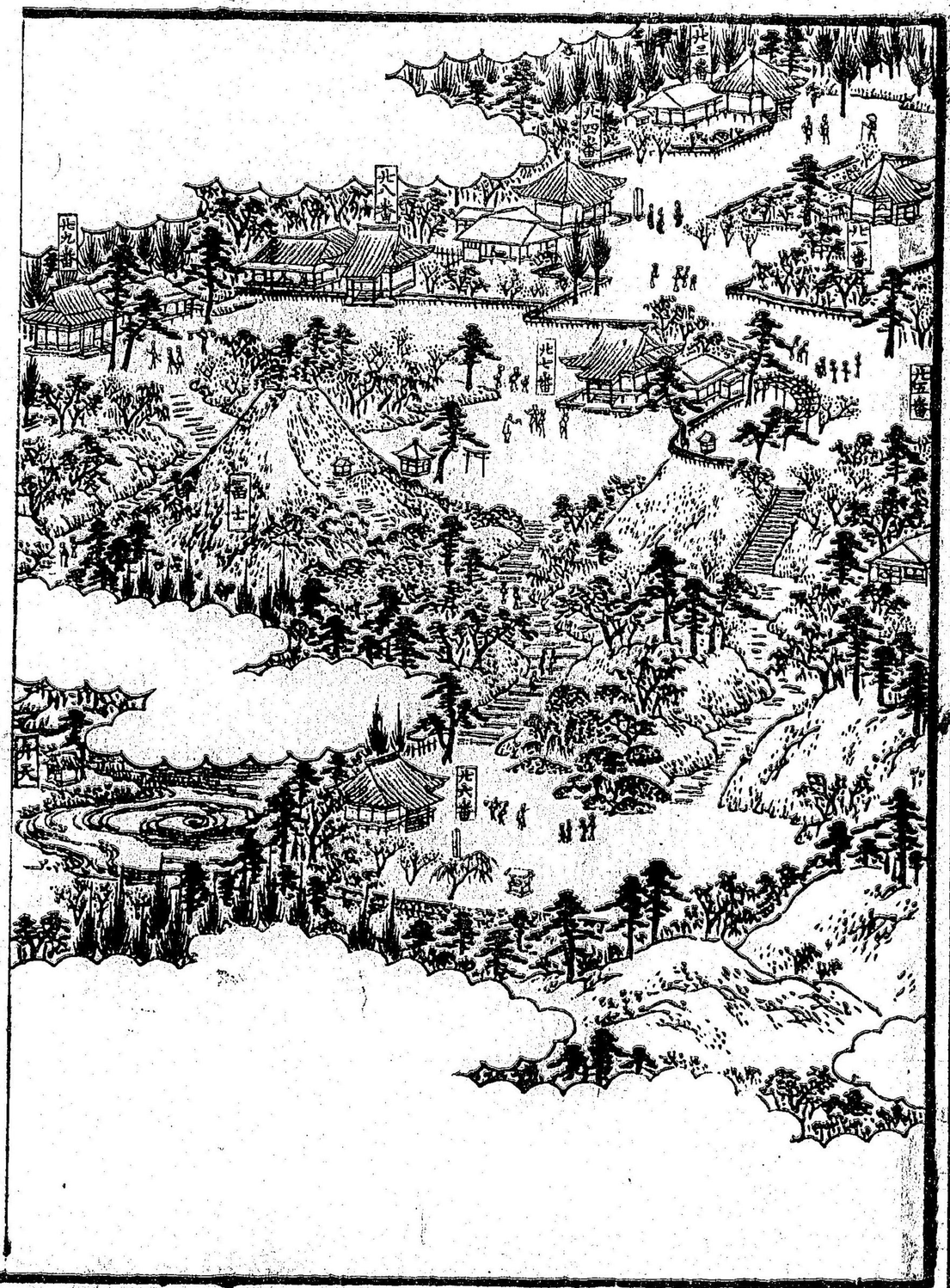

護國寺
其二

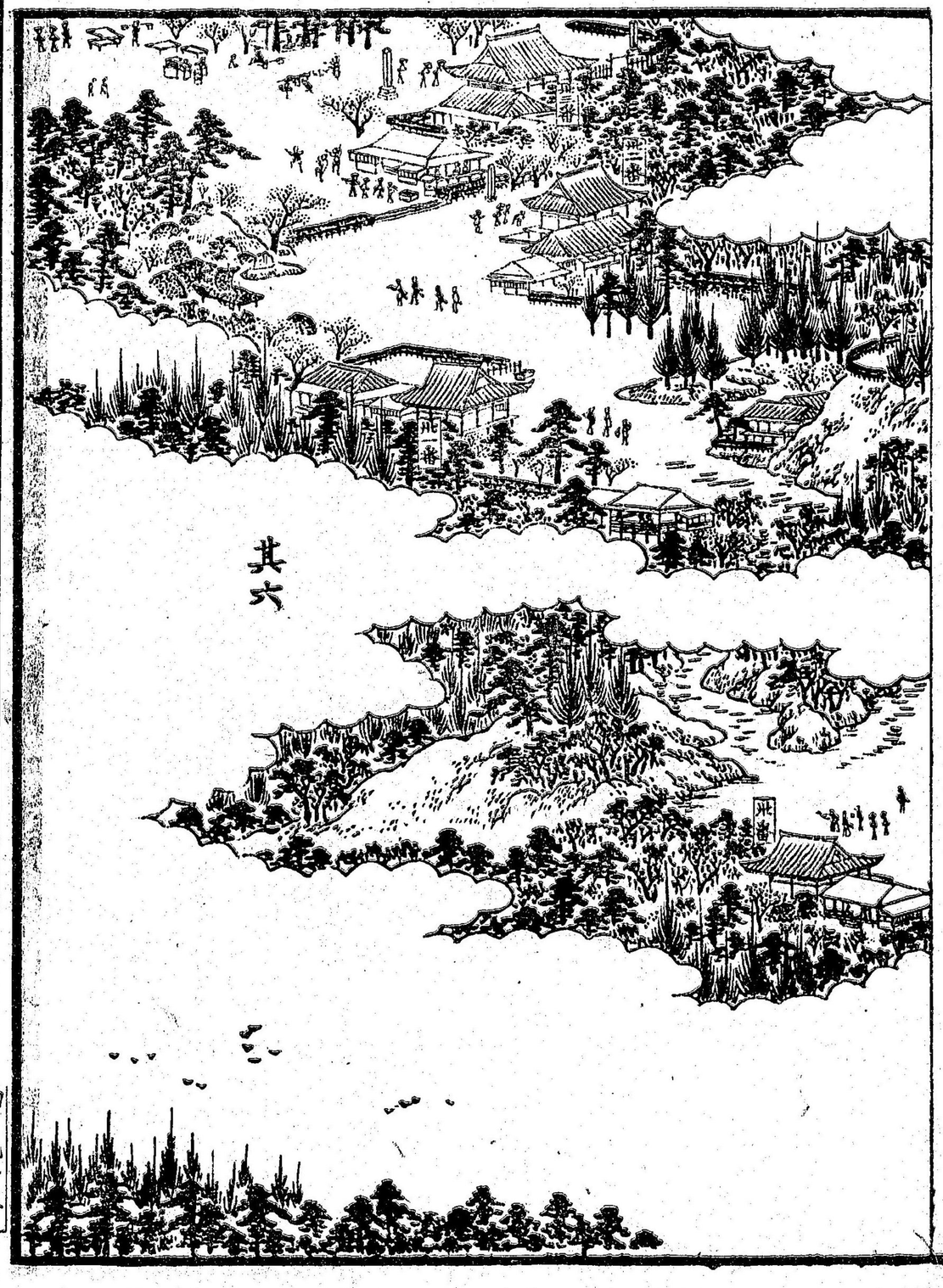



其三
淨土本願寺

護國寺境内
西國十所寫三十三所觀音の圖

其四


北三番
北四番
北八番
北九番
北七番
北五番
北十番
北十一番
北十二番
北十三番
北十四番
北十五番
北十六番
北十七番
北十八番
北十九番
北二十番
北二十一番
北二十二番
北二十三番
北二十四番
北二十五番
北二十六番
北二十七番
北二十八番
北二十九番
北三十番
北三十一番
北三十二番
北三十三番
北三十四番
北三十五番
北三十六番
北三十七番
北三十八番
北三十九番
北四十番
北四十一番
北四十二番
北四十三番
北四十四番
北四十五番
北四十六番
北四十七番
北四十八番
北四十九番
北五十番
北五十一番
北五十二番
北五十三番
北五十四番
北五十五番
北五十六番
北五十七番
北五十八番
北五十九番
北六十番
北六十一番
北六十二番
北六十三番
北六十四番
北六十五番
北六十六番
北六十七番
北六十八番
北六十九番
北七十番
北七十一番
北七十二番
北七十三番
北七十四番
北七十五番
北七十六番
北七十七番
北七十八番
北七十九番
北八十番
北八十一番
北八十二番
北八十三番
北八十四番
北八十五番
北八十六番
北八十七番
北八十八番
北八十九番
北九十番
北九十一番
北九十二番
北九十三番
北九十四番
北九十五番
北九十六番
北九十七番
北九十八番
北九十九番
北百番
北百一番
北百二番
北百三番
北百四番
北百五番
北百六番
北百七番
北百八番
北百九番
北百十番
北百十一番
北百十二番
北百十三番
北百十四番
北百十五番
北百十六番
北百十七番
北百十八番
北百十九番
北百二十番
北百二十一番
北百二十二番
北百二十三番
北百二十四番
北百二十五番
北百二十六番
北百二十七番
北百二十八番
北百二十九番
北百三十番
北百三十一番
北百三十二番
北百三十三番
北百三十四番
北百三十五番
北百三十六番
北百三十七番
北百三十八番
北百三十九番
北百四十番
北百四十一番
北百四十二番
北百四十三番
北百四十四番
北百四十五番
北百四十六番
北百四十七番
北百四十八番
北百四十九番
北百五十番
北百五十一番
北百五十二番
北百五十三番
北百五十四番
北百五十五番
北百五十六番
北百五十七番
北百五十八番
北百五十九番
北百六十番
北百六十一番
北百六十二番
北百六十三番
北百六十四番
北百六十五番
北百六十六番
北百六十七番
北百六十八番
北百六十九番
北百七十番
北百七十一番
北百七十二番
北百七十三番
北百七十四番
北百七十五番
北百七十六番
北百七十七番
北百七十八番
北百七十九番
北百八十番
北百八十一番
北百八十二番
北百八十三番
北百八十四番
北百八十五番
北百八十六番
北百八十七番
北百八十八番
北百八十九番
北百九十番
北百九十一番
北百九十二番
北百九十三番
北百九十四番
北百九十五番
北百九十六番
北百九十七番
北百九十八番
北百九十九番
北二百番
北二百一番
北二百二番
北二百三番
北二百四番
北二百五番
北二百六番
北二百七番
北二百八番
北二百九番
北二百十番
北二百十一番
北二百十二番
北二百十三番
北二百十四番
北二百十五番
北二百十六番
北二百十七番
北二百十八番
北二百十九番
北二百二十番
北二百二十一番
北二百二十二番
北二百二十三番
北二百二十四番
北二百二十五番
北二百二十六番
北二百二十七番
北二百二十八番
北二百二十九番
北三百番
北三百一番
北三百二番
北三百三番
北三百四番
北三百五番
北三百六番
北三百七番
北三百八番
北三百九番
北三百十番
北三百十一番
北三百十二番
北三百十三番
北三百十四番
北三百十五番
北三百十六番
北三百十七番
北三百十八番
北三百十九番
北三百二十番
北三百二十一番
北三百二十二番
北三百二十三番
北三百二十四番
北三百二十五番
北三百二十六番
北三百二十七番
北三百二十八番
北三百二十九番
北三百三十番
北三百三十一番
北三百三十二番
北三百三十三番
北三百三十四番
北三百三十五番
北三百三十六番
北三百三十七番
北三百三十八番
北三百三十九番
北四百番
北四百一番
北四百二番
北四百三番
北四百四番
北四百五番
北四百六番
北四百七番
北四百八番
北四百九番
北四百十番
北四百十一番
北四百十二番
北四百十三番
北四百十四番
北四百十五番
北四百十六番
北四百十七番
北四百十八番
北四百十九番
北四百二十番
北四百二十一番
北四百二十二番
北四百二十三番
北四百二十四番
北四百二十五番
北四百二十六番
北四百二十七番
北四百二十八番
北四百二十九番
北五百番
北五百一番
北五百二番
北五百三番
北五百四番
北五百五番
北五百六番
北五百七番
北五百八番
北五百九番
北五百十番
北五百十一番
北五百十二番
北五百十三番
北五百十四番
北五百十五番
北五百十六番
北五百十七番
北五百十八番
北五百十九番
北五百二十番
北五百二十一番
北五百二十二番
北五百二十三番
北五百二十四番
北五百二十五番
北五百二十六番
北五百二十七番
北五百二十八番
北五百二十九番
北六百番
北六百一番
北六百二番
北六百三番
北六百四番
北六百五番
北六百六番
北六百七番
北六百八番
北六百九番
北六百十番
北六百十一番
北六百十二番
北六百十三番
北六百十四番
北六百十五番
北六百十六番
北六百十七番
北六百十八番
北六百十九番
北六百二十番
北六百二十一番
北六百二十二番
北六百二十三番
北六百二十四番
北六百二十五番
北六百二十六番
北六百二十七番
北六百二十八番
北六百二十九番
北七百番
北七百一番
北七百二番
北七百三番
北七百四番
北七百五番
北七百六番
北七百七番
北七百八番
北七百九番
北七百十番
北七百十一番
北七百十二番
北七百十三番
北七百十四番
北七百十五番
北七百十六番
北七百十七番
北七百十八番
北七百十九番
北七百二十番
北七百二十一番
北七百二十二番
北七百二十三番
北七百二十四番
北七百二十五番
北七百二十六番
北七百二十七番
北七百二十八番
北七百二十九番
北八百番
北八百一番
北八百二番
北八百三番
北八百四番
北八百五番
北八百六番
北八百七番
北八百八番
北八百九番
北八百十番
北八百十一番
北八百十二番
北八百十三番
北八百十四番
北八百十五番
北八百十六番
北八百十七番
北八百十八番
北八百十九番
北八百二十番
北八百二十一番
北八百二十二番
北八百二十三番
北八百二十四番
北八百二十五番
北八百二十六番
北八百二十七番
北八百二十八番
北八百二十九番
北九百番
北九百一番
北九百二番
北九百三番
北九百四番
北九百五番
北九百六番
北九百七番
北九百八番
北九百九番
北九百十番
北九百十一番
北九百十二番
北九百十三番
北九百十四番
北九百十五番
北九百十六番
北九百十七番
北九百十八番
北九百十九番
北九百二十番
北九百二十一番
北九百二十二番
北九百二十三番
北九百二十四番
北九百二十五番
北九百二十六番
北九百二十七番
北九百二十八番
北九百二十九番
北千番
北千一番
北千二番
北千三番
北千四番
北千五番
北千六番
北千七番
北千八番
北千九番
北二千番
北二千一番
北二千二番
北二千三番
北二千四番
北二千五番
北二千六番
北二千七番
北二千八番
北二千九番
北三千番
北三千一番
北三千二番
北三千三番
北三千四番
北三千五番
北三千六番
北三千七番
北三千八番
北三千九番
北四千番
北四千一番
北四千二番
北四千三番
北四千四番
北四千五番
北四千六番
北四千七番
北四千八番
北四千九番
北五千番
北五千一番
北五千二番
北五千三番
北五千四番
北五千五番
北五千六番
北五千七番
北五千八番
北五千九番
北六千番
北六千一番
北六千二番
北六千三番
北六千四番
北六千五番
北六千六番
北六千七番
北六千八番
北六千九番
北七千番
北七千一番
北七千二番
北七千三番
北七千四番
北七千五番
北七千六番
北七千七番
北七千八番
北七千九番
北八千番
北八千一番
北八千二番
北八千三番
北八千四番
北八千五番
北八千六番
北八千七番
北八千八番
北八千九番
北九千番
北九千一番
北九千二番
北九千三番
北九千四番
北九千五番
北九千六番
北九千七番
北九千八番
北九千九番
北百千番
北百千一番
北百千二番
北百千三番
北百千四番
北百千五番
北百千六番
北百千七番
北百千八番
北百千九番
北二百千番
北二百千一番
北二百千二番
北二百千三番
北二百千四番
北二百千五番
北二百千六番
北二百千七番
北二百千八番
北二百千九番
北三百千番
北三百千一番
北三百千二番
北三百千三番
北三百千四番
北三百千五番
北三百千六番
北三百千七番
北三百千八番
北三百千九番
北四百千番
北四百千一番
北四百千二番
北四百千三番
北四百千四番
北四百千五番
北四百千六番
北四百千七番
北四百千八番
北四百千九番
北五百千番
北五百千一番
北五百千二番
北五百千三番
北五百千四番
北五百千五番
北五百千六番
北五百千七番
北五百千八番
北五百千九番
北六百千番
北六百千一番
北六百千二番
北六百千三番
北六百千四番
北六百千五番
北六百千六番
北六百千七番
北六百千八番
北六百千九番
北七百千番
北七百千一番
北七百千二番
北七百千三番
北七百千四番
北七百千五番
北七百千六番
北七百千七番
北七百千八番
北七百千九番
北八百千番
北八百千一番
北八百千二番
北八百千三番
北八百千四番
北八百千五番
北八百千六番
北八百千七番
北八百千八番
北八百千九番
北九百千番
北九百千一番
北九百千二番
北九百千三番
北九百千四番
北九百千五番
北九百千六番
北九百千七番
北九百千八番
北九百千九番
北千千番
北千千一番
北千千二番
北千千三番
北千千四番
北千千五番
北千千六番
北千千七番
北千千八番
北千千九番
北二千千番
北二千千一番
北二千千二番
北二千千三番
北二千千四番
北二千千五番
北二千千六番
北二千千七番
北二千千八番
北二千千九番
北三千千番
北三千千一番
北三千千二番
北三千千三番
北三千千四番
北三千千五番
北三千千六番
北三千千七番
北三千千八番
北三千千九番
北四千千番
北四千千一番
北四千千二番
北四千千三番
北四千千四番
北四千千五番
北四千千六番
北四千千七番
北四千千八番
北四千千九番
北五千千番
北五千千一番
北五千千二番
北五千千三番
北五千千四番
北五千千五番
北五千千六番
北五千千七番
北五千千八番
北五千千九番
北六千千番
北六千千一番
北六千千二番
北六千千三番
北六千千四番
北六千千五番
北六千千六番
北六千千七番
北六千千八番
北六千千九番
北七千千番
北七千千一番
北七千千二番
北七千千三番
北七千千四番
北七千千五番
北七千千六番
北七千千七番
北七千千八番
北七千千九番
北八千千番
北八千千一番
北八千千二番
北八千千三番
北八千千四番
北八千千五番
北八千千六番
北八千千七番
北八千千八番
北八千千九番
北九千千番
北九千千一番
北九千千二番
北九千千三番
北九千千四番
北九千千五番
北九千千六番
北九千千七番
北九千千八番
北九千千九番
北百千千番
北百千千一番
北百千千二番
北百千千三番
北百千千四番
北百千千五番
北百千千六番
北百千千七番
北百千千八番
北百千千九番
北二百千千番
北二百千千一番
北二百千千二番
北二百千千三番
北二百千千四番
北二百千千五番
北二百千千六番
北二百千千七番
北二百千千八番
北二百千千九番
北三百千千番
北三百千千一番
北三百千千二番
北三百千千三番
北三百千千四番
北三百千千五番
北三百千千六番
北三百千千七番
北三百千千八番
北三百千千九番
北四百千千番
北四百千千一番
北四百千千二番
北四百千千三番
北四百千千四番
北四百千千五番
北四百千千六番
北四百千千七番
北四百千千八番
北四百千千九番
北五百千千番
北五百千千一番
北五百千千二番
北五百千千三番
北五百千千四番
北五百千千五番
北五百千千六番
北五百千千七番
北五百千千八番
北五百千千九番
北六百千千番
北六百千千一番
北六百千千二番
北六百千千三番
北六百千千四番
北六百千千五番
北六百千千六番
北六百千千七番
北六百千千八番
北六百千千九番
北七百千千番
北七百千千一番
北七百千千二番
北七百千千三番
北七百千千四番
北七百千千五番
北七百千千六番
北七百千千七番
北七百千千八番
北七百千千九番
北八百千千番
北八百千千一番
北八百千千二番
北八百千千三番
北八百千千四番
北八百千千五番
北八百千千六番
北八百千千七番
北八百千千八番
北八百千千九番
北九百千千番
北九百千千一番
北九百千千二番
北九百千千三番
北九百千千四番
北九百千千五番
北九百千千六番
北九百千千七番
北九百千千八番
北九百千千九番
北千千千番
北千千千一番
北千千千二番
北千千千三番
北千千千四番
北千千千五番
北千千千六番
北千千千七番
北千千千八番
北千千千九番
北二千千千番
北二千千千一番
北二千千千二番
北二千千千三番
北二千千千四番
北二千千千五番
北二千千千六番
北二千千千七番
北二千千千八番
北二千千千九番
北三千千千番
北三千千千一番
北三千千千二番
北三千千千三番
北三千千千四番
北三千千千五番
北三千千千六番
北三千千千七番
北三千千千八番
北三千千千九番
北四千千千番
北四千千千一番
北四千千千二番
北四千千千三番
北四千千千四番
北四千千千五番
北四千千千六番
北四千千千七番
北四千千千八番
北四千千千九番
北五千千千番
北五千千千一番
北五千千千二番
北五千千千三番
北五千千千四番
北五千千千五番
北五千千千六番
北五千千千七番
北五千千千八番
北五千千千九番
北六千千千番
北六千千千一番
北六千千千二番
北六千千千三番
北六千千千四番
北六千千千五番
北六千千千六番
北六千千千七番
北六千千千八番
北六千千千九番
北七千千千番
北七千千千一番
北七千千千二番
北七千千千三番
北七千千千四番
北七千千千五番
北七千千千六番
北七千千千七番
北七千千千八番
北七千千千九番
北八千千千番
北八千千千一番
北八千千千二番
北八千千千三番
北八千千千四番
北八千千千五番
北八千千千六番
北八千千千七番
北八千千千八番
北八千千千九番
北九千千千番
北九千千千一番
北九千千千二番
北九千千千三番
北九千千千四番
北九千千千五番
北九千千千六番
北九千千千七番
北九千千千八番
北九千千千九番
北百千千千番
北百千千千一番
北百千千千二番
北百千千千三番
北百千千千四番
北百千千千五番
北百千千千六番
北百千千千七番
北百千千千八番
北百千千千九番
北二百千千千番
北二百千千千一番
北二百千千千二番
北二百千千千三番
北二百千千千四番
北二百千千千五番
北二百千千千六番
北二百千千千七番
北二百千千千八番
北二百千千千九番
北三百千千千番
北三百千千千一番
北三百千千千二番
北三百千千千三番
北三百千千千四番
北三百千千千五番
北三百千千千六番
北三百千千千七番
北三百千千千八番
北三百千千千九番
北四百千千千番
北四百千千千一番
北四百千千千二番
北四百千千千三番
北四百千千千四番
北四百千千千五番
北四百千千千六番
北四百千千千七番
北四百千千千八番
北四百千千千九番
北五百千千千番
北五百千千千一番
北五百千千千二番
北五百千千千三番
北五百千千千四番
北五百千千千五番
北五百千千千六番
北五百千千千七番
北五百千千千八番
北五百千千千九番
北六百千千千番
北六百千千千一番
北六百千千千二番
北六百千千千三番
北六百千千千四番
北六百千千千五番
北六百千千千六番
北六百千千千七番
北六百千千千八番
北六百千千千九番
北七百千千千番
北七百千千千一番
北七百千千千二番
北七百千千千三番
北七百千千千四番
北七百千千千五番
北七百千千千六番
北七百千千千七番
北七百千千千八番
北七百千千千九番
北八百千千千番
北八百千千千一番
北八百千千千二番
北八百千千千三番
北八百千千千四番
北八百千千千五番
北八百千千千六番
北八百千千千七番
北八百千千千八番
北八百千千千九番
北九百千千千番
北九百千千千一番
北九百千千千二番
北九百千千千三番
北九百千千千四番
北九百千千千五番
北九百千千千六番
北九百千千千七番
北九百千千千八番
北九百千千千九番
北千千千千番
北千千千千一番
北千千千千二番
北千千千千三番
北千千千千四番
北千千千千五番
北千千千千六番
北千千千千七番
北千千千千八番
北千千千千九番
北二千千千千番
北二千千千千一番
北二千千千千二番
北二千千千千三番
北二千千千千四番
北二千千千千五番
北二千千千千六番
北二千千千千七番
北二千千千千八番
北二千千千千九番
北三千千千千番
北三千千千千一番
北三千千千千二番
北三千千千千三番
北三千千千千四番
北三千千千千五番
北三千千千千六番
北三千千千千七番
北三千千千千八番
北三千千千千九番
北四千千千千番
北四千千千千一番
北四千千千千二番
北四千千千千三番
北四千千千千四番
北四千千千千五番
北四千千千千六番
北四千千千千七番
北四千千千千八番
北四千千千千九番
北五千千千千番
北五千千千千一番
北五千千千千二番
北五千千千千三番
北五千千千千四番
北五千千千千五番
北五千千千千六番
北五千千千千七番
北五千千千千八番
北五千千千千九番
北六千千千千番
北六千千千千一番
北六千千千千二番
北六千千千千三番
北六千千千千四番
北六千千千千五番
北六千千千千六番
北六千千千千七番
北六千千千千八番
北六千千千千九番
北七千千千千番
北七千千千千一番
北七千千千千二番
北七千千千千三番
北七千千千千四番
北七千千千千五番
北七千千千千六番
北七千千千千七番
北七千千千千八番
北七千千千千九番
北八千千千千番
北八千千千千一番
北八千千千千二番
北八千千千千三番
北八千千千千四番
北八千千千千五番
北八千千千千六番
北八千千千千七番
北八千千千千八番
北八千千千千九番
北九千千千千番
北九千千千千一番
北九千千千千二番
北九千千千千三番
北九千千千千四番
北九千千千千五番
北九千千千千六番
北九千千千千七番
北九千千千千八番
北九千千千千九番
北百千千千千番
北百千千千千一番
北百千千千千二番
北百千千千千三番
北百千千千千四番
北百千千千千五番
北百千千千千六番
北百千千千千七番
北百千千千千八番
北百千千千千九番
北二百千千千千番
北二百千千千千一番
北二百千千千千二番
北二百千千千千三番
北二百千千千千四番
北二百千千千千五番
北二百千千千千六番
北二百千千千千七番
北二百千千千千八番
北二百千千千千九番
北三百千千千千番
北三百千千千千一番
北三百千千千千二番
北三百千千千千三番
北三百千千千千四番
北三百千千千千五番
北三百千千千千六番
北三百千千千千七番
北三百千千千千八番
北三百千千千千九番
北四百千千千千番
北四百千千千千一番
北四百千千千千二番
北四百千千千千三番
北四百千千千千四番
北四百千千千千五番
北四百千千千千六番
北四百千千千千七番
北四百千千千千八番
北四百千千千千九番
北五百千千千千番
北五百千千千千一番
北五百千千千千二番
北五百千千千千三番
北五百千千千千四番
北五百千千千千五番
北五百千千千千六番
北五百千千千千七番
北五百千千千千八番
北五百千千千千九番
北六百千千千千番
北六百千千千千一番
北六百千千千千二番
北六百千千千千三番
北六百千千千千四番
北六百千千千千五番
北六百千千千千六番
北六百千千千千七番
北六百千千千千八番
北六百千千千千九番
北七百千千千千番
北七百千千千千一番
北七百千千千千二番
北七百千千千千三番
北七百千千千千四番
北七百千千千千五番
北七百千千千千六番
北七百千千千千七番
北七百千千千千八番
北七百千千千千九番
北八百千千千千番
北八百千千千千一番
北八百千千千千二番
北八百千千千千三番
北八百千千千千四番
北八百千千千千五番
北八百千千千千六番
北八百千千千千七番
北八百千千千千八番
北八百千千千千九番
北九百千千千千番
北九百千千千千一番
北九百千千千千二番
北九百千千千千三番
北九百千千千千四番
北九百千千千千五番
北九百千千千千六番
北九百千千千千七番
北九百千千千千八番
北九百千千千千九番
北千千千千千番
北千千千千千一番
北千千千千千二番
北千千千千千三番
北千千千千千四番
北千千千千千五番
北千千千千千六番
北千千千千千七番
北千千千千千八番
北千千千千千九番
北二千千千千千番
北二千千千千千一番
北二千千千千千二番
北二千千千千千三番
北二千千千千千四番
北二千千千千千五番
北二千千千千千六番
北二千千千千千七番
北二千千千千千八番
北二千千千千千九番
北三千千千千千番
北三千千千千千一番
北三千千千千千二番
北三千千千千千三番
北三千千千千千四番
北三千千千千千五番
北三千千千千千六番
北三千千千千千七番
北三千千千千千八番
北三千千千千千九番
北四千千千千千番
北四千千千千千一番
北四千千千千千二番
北四千千千千千三番
北四千千千千千四番
北四千千千千千五番
北四千千千千千六番
北四千千千千千七番
北四千千千千千八番
北四千千千千千九番
北五千千千千千番
北五千千千千千一番
北五千千千千千二番
北五千千千千千三番
北五千千千千千四番
北五千千千千千五番
北五千千千千千六番
北五千千千千千七番
北五千千千千千八番
北五千千千千千九番
北六千千千千千番
北六千千千千千一番
北六千千千千千二番
北六千千千千千三番
北六千千千千千四番
北六千千千千千五番
北六千千千千千六番
北六千千千千千七番
北六千千千千千八番
北六千千千千千九番
北七千千千千千番
北七千千千千千一番
北七千千千千千二番
北七千千千千千三番
北七千千千千千四番
北七千千千千千五番
北七千千千千千六番
北七千千千千千七番
北七千千千千千八番
北七千千千千千九番
北八千千千千千番
北八千千千千千一番
北八千千千千千二番
北八千千千千千三番
北八千千千千千四番
北八千千千千千五番
北八千千千千千六番
北八千千千千千七番
北八千千千千千八番
北八千千千千千九番
北九千千千千千番
北九千千千千千一番
北九千千千千千二番
北九千千千千千三番
北九千千千千千四番
北九千千千千千五番
北九千千千千千六番
北九千千千千千七番
北九千千千千千八番
北九千千千千千九番
北百千千千千千番
北百千千千千千一番
北百千千千千千二番
北百千千千千千三番
北百千千千千千四番
北百千千千千千五番
北百千千千千千六番
北百千千千千千七番
北百千千千千千八番
北百千千千千千九番
北二百千千千千千番
北二百千千千千千一番
北二百千千千千千二番
北二百千千千千千三番
北二百千千千千千四番
北二百千千千千千五番
北二百千千千千千六番
北二百千千千千千七番
北二百千千千千千八番
北二百千千千千千九番
北三百千千千千千番
北三百千千千千千一番
北三百千千千千千二番
北三百千千千千千三番
北三百千千千千千四番
北三百千千千千千五番
北三百千千千千千六番
北三百千千千千千七番
北三百千千千千千八番
北三百千千千千千九番
北四百千千千千千番
北四百千千千千千一番
北四百千千千千千二番
北四百千千千千千三番
北四百千千千千千四番
北四百千千千千千五番
北四百千千千千千六番
北四百千千千千千七番
北四百千千千千千八番
北四百千千千千千九番
北五百千千千千千番
北五百千千千千千一番
北五百千千千千千二番
北五百千千千千千三番
北五百千千千千千四番
北五百千千千千千五番
北五百千千千千千六番
北五百千千千千千七番
北五百千千千千千八番
北五百千千千千千九番
北六百千千千千千番
北六百千千千千千一番
北六百千千千千千二番
北六百千千千千千三番
北六百千千千千千四番
北六百千千千千千五番
北六百千千千千千六番
北六百千千千千千七番
北六百千千千千千八番
北六百千千千千千九番
北七百千千千千千番
北七百千千千千千一番
北七百千千千千千二番
北七百千千千千千三番
北七百千千千千千四番
北七百千千千千千五番
北七百千千千千千六番
北七百千千千千千七番
北七百千千千千千八番
北七百千千千千千九番
北八百千千千千千番
北八百千千千千千一番
北八百千千千千千二番
北八百千千千千千三番
北八百千千千千千四番
北八百千千千千千五番
北八百千千千千千六番
北八百千千千千千七番
北八百千千千千千八番
北八百千千千千千九番
北九百千千千千千番
北九百千千千千千一番
北九百千千千千千二番
北九百千千千千千三番
北九百千千千千千四番
北九百千千千千千五番
北九百千千千千千六番
北九百千千千千千七番
北九百千千千千千八番
北九百千千千千千九番
北千千千千千千番
北千千千千千千一番
北千千千千千千二番
北千千千千千千三番
北千千千千千千四番
北千千千千千千五番
北千千千千千千六番
北千千千千千千七番
北千千千千千千八番
北千千千千千千九番
北二千千千千千千番
北二千千千千千千一番
北二千千千千千千二番
北二千千千千千千三番
北二千千千千千千四番
北二千千千千千千五番
北二千千千千千千六番
北二千千千千千千七番
北二千千千千千千八番
北二千千千千千千九番
北三千千千千千千番
北三千千千千千千一番
北三千千千千千千二番
北三千千千千千千三番
北三千千千千千千四番
北三千千千千千千五番
北三千千千千千千六番
北三千千千千千千七番
北三千千千千千千八番
北三千千千千千千九番
北四千千千千千千番
北四千千千千千千一番
北四千千千千千千二番
北四千千千千千千三番
北四千千千千千千四番
北四千千千千千千五番
北四千千千千千千六番
北四千千千千千千七番
北四千千千千千千八番
北四千千千千千千九番
北五千千千千千千番
北五千千千千千千一番
北五千千千千千千二番
北五千千千千千千三番
北五千千千千千千四番
北五千千千千千千五番
北五千千千千千千六番
北五千千千千千千七番
北五千千千千千千八番
北五千千千千千千九番
北六千千千千千千番
北六千千千千千千一番
北六千千千千千千二番
北六千千千千千千三番
北六千千千千千千四番
北六千千千千千千五番
北六千千千千千千六番
北六千千千千千千七番
北六千千千千千千八番
北六千千千千千千九番
北七千千千千千千番
北七千千千千千千一番
北七千千千千千千二番
北七千千千千千千三番
北七千千千千千千四番
北七千千千千千千五番
北七千千千千千千六番
北七千千千千千千七番
北七千千千千千千八番
北七千千千千千千九番
北八千千千千千千番
北八千千千千千千一番
北八千千千千千千二番
北八千千千千千千三番
北八千千千千千千四番
北八千千千千千千五番
北八千千千千千千六番
北八千千千千千千七番
北八千千千千千千八番
北八千千千千千千九番
北九千千千千千千番
北九千千千千千千一番
北九千千千千千千二番
北九千千千千千千三番
北九千千千千千千四番
北九千千千千千千五番
北九千千千千千千六番
北九千千千千千千七番
北九千千千千千千八番
北九千千千千千千九番
北百千千千千千千番
北百千千千千千千一番
北百千千千千千千二番
北百千千千千千千三番
北百千千千千千千四番
北百千千千千千千五番
北百千千千千千千六番
北百千千千千千千七番
北百千千千千千千八番
北百千千千千千千九番
北二百千千千千千千番
北二百千千千千千千一番
北二百千千千千千千二番
北二百千千千千千千三番
北二百千千千千千千四番
北二百千千千千千千五番
北二百千千千千千千六番
北二百千千千千千千七番
北二百千千千千千千八番
北二百千千千千千千九番
北三百千千千千千千番
北三百千千千千千千一番
北三百千千千千千千二番
北三百千千千千千千三番
北三百千千千千千千四番
北三百千千千千千千五番
北三百千千千千千千六番
北三百千千千千千千七番
北三百千千千千千千八番
北三百千千千千千千九番
北四百千千千千千千番
北四百千千千千千千一番
北四百千千千千千千二番
北四百千千千千千千三番
北四百千千千千千千四番
北四百千千千千千千五番
北四百千千千千千千六番
北四百千千千千千千七番
北四百千千千千千千八番
北四百千千千千千千九番
北五百千千千千千千番
北五百千千千千千千一番
北五百千千千千千千二番
北五百千千千千千千三番
北五百千千千千千千四番
北五百千千千千千千五番
北五百千千千千千千六番
北五百千千千千千千七番
北五百千千千千千千八番
北五百千千千千千千九番
北六百千千千千千千番
北六百千千千千千千一番
北六百千千千千千千二番
北六百千千千千千千三番
北六百千千千千千千四番
北六百千千千千千千五番
北六百千千千千千千六番
北六百千千千千千千七番
北六百千千千千千千八番
北六百千千千千千千九番
北七百千千千千千千番
北七百千千千千千千一番
北七百千千千千千千二番
北七百千千千千千千三番
北七百千千千千千千四番
北七百千千千千千千五番
北七百千千千千千千六番
北七百千千千千千千七番
北七百千千千千千千八番
北七百千千千千千千九番
北八百千千千千千千番
北八百千千千千千千一番
北八百千千千千千千二番
北八百千千千千千千三番
北八百千千千千千千四番
北八百千千千千千千五番
北八百千千千千千千六番
北八百千千千千千千七番
北八百千千千千千千八番
北八百千千千千千千九番
北九百千千千千千千番
北九百千千千千千千一番
北九百千千千千千千二番
北九百千千千千千千三番
北九百千千千千千千四番
北九百千千千千千千五番
北九百千千千千千千六番
北九百千千千千千千七番
北九百千千千千千千八番
北九百千千千千千千九番
北千千千千千千千番
北千千千千千千千一番
北千千千千千千千二番
北千千千千千千千三番
北千千千千千千千四番
北千千千千千千千五番
北千千千千千千千六番
北千千千千千千千七番
北千千千千千千千八番
北千千千千千千千九番
北二千千千千千千千番
北二千千千千千千千一番
北二千千千千千千千二番
北二千千千千千千千三番
北二千千千千千千千四番
北二千千千千千千千五番
北二千千千千千千千六番
北二千千千千千千千七番
北二千千千千千千千八番
北二千千千千千千千九番
北三千千千千千千千番
北三千千千千千千千一番
北三千千千千千千千二番
北三千千千千千千千三番
北三千千千千千千千四番
北三千千千千千千千五番
北三千千千千千千千六番
北三千千千千千千千七番
北三千千千千千千千八番
北三千千千千千千千九番
北四千千千千千千千番
北四千千千千千千千一番
北四千千千千千千千二番
北四千千千千千千千三番
北四千千千千千千千四番
北四千千千千千千千五番
北四千千千千千千千六番
北四千千千千千千千七番
北四千千千千千千千八番
北四千千千千千千千九番
北五千千千千千千千番
北五千千千千千千千一番
北五千千千千千千千二番
北五千千千千千千千三番
北五千千千千千千千四番
北五千千千千千千千五番
北五千千千千千千千六番
北五千千千千千千千七番
北五千千千千千千千八番
北五千千千千千千千九番
北六千千千千千千千番
北六千千千千千千千一番
北六千千千千千千千二番
北六千千千千千千千三番
北六千千千千千千千四番
北六千千千千千千千五番
北六千千千千千千千六番
北六千千千千千千千七番
北六千千千千千千千八番
北六千千千千千千千九番
北七千千千千千千千番
北七千千千千千千千一番
北七千千千千千千千二番
北七千千千千千千千三番
北七千千千千千千千四番
北七千千千千千千千五番
北七千千千千千千千六番
北七千千千千千千千七番
北七千千千千千千千八番
北七千千千千千千千九番
北八千千千千千千千番
北八千千千千千千千一番
北八千千千千千千千二番
北八千千千千千千千三番
北八千千千千千千千四番
北八千千千千千千千五番
北八千千千千千千千六番
北八千千千千千千千七番
北八千千千千千千千八番
北八千千千千千千千九番
北九千千千千千千千番
北九千千千千千千千一番
北九千千千千千千千二番
北九千千千千千千千三番
北九千千千千千千千四番
北九千千千千千千千五番
北九千千千千千千千六番
北九千千千千千千千七番
北九千千千千千千千八番
北九千千千千千千千九番
北百千千千千千千千番
北百千千千千千千千一番
北百千千千千千千千二番
北百千千千千千千千三番
北百千千千千千千千四番
北百千千千千千千千五番
北百千千千千千千千六番
北百千千千千千千千七番
北百千千千千千千千八番
北百千千千千千千千九番
北二百千千千千千千千番
北二百千千千千千千千一番
北二百千千千千千千千二番
北二百千千千千千千千三番
北二百千千千千千千千四番
北二百千千千千千千千五番
北二百千千千千千千千六番
北二百千千千千千千千七番
北二百千千千千千千千八番
北二百千千千千千千千九番
北三百千千千千千千千番
北三百千千千千千千千一番
北三百千千千千千千千二番
北三百千千千千千千千三番
北三百千千千千千千千四番
北三百千千千千千千千五番
北三百千千千千千千千六番
北三百千千千千千千千七番
北三百千千千千千千千八番
北三百千千千千千千千九番
北四百千千千千千千千番
北四百千千千千千千千一番
北四百千千千千千千千二番
北四百千千千千千千千三番
北四百千千千千千千千四番
北四百千千千千千千千五番
北四百千千千千千千千六番
北四百千千千千千千千七番
北四百千千千千千千千八番
北四百千千千千千千千九番
北五百千千千千千千千番
北五百千千千千千千千一番
北五百千千千千千千千二番
北五百千千千千千千千三番
北五百千千千千千千千四番
北五百千千千千千千千五番
北五百千千千千千千千六番
北五百千千千千千千千七番
北五百千千千千千千千八番
北五百千千千千千千千九番
北六百千千千千千千千番
北六百千千千千千千千一番
北六百千千千千千千千二番
北六百千千千千千千千三番
北六百千千千千千千千四番
北六百千千千千千千千五番
北六百千千千千千千千六番
北六百千千千千千千千七番
北六百千千千千千千千八番
北六百千千千千千千千九番
北七百千千千千千千千番
北七百千千千千千千千一番
北七百千千千千千千千二番
北七百千千千千千千千三番
北七百千千千千千千千四番
北七百千千千千千千千五番
北七百千千千千千千千六番
北七百千千千千千千千七番
北七百千千千千千千千八番
北七百千千千千千千千九番
北八百千千千千千千千番
北八百千千千千千千千一番
北八百千千千千千千千二番
北八百千千千千千千千三番
北八百千千千千千千千四番
北八百千千千千千千千五番
北八百千千千千千千千六番
北八百千千千千千千千七番
北八百千千千千千千千八番
北八百千千千千千千千九番
北九百千千千千千千千番
北九百千千千千千千千一番
北九百千千千千千千千二番
北九百千千千千千千千三番
北九百千千千千千千千四番
北九百千千千千千千千五番
北九百千千千千千千千六番
北九百千千千千千千千七番
北九百千千千千千千千八番
北九百千千千千千千千九番
北千千千千千千千千番
北千千千千千千千千一番
北千千千千千千千千二番
北千千千千千千千千三番
北千千千千千千千千四番
北千千千千千千千千五番
北千千千千千千千千六番
北千千千千千千千千七番
北千千千千千千千千八番
北千千千千千千千千九番
北二千千千千千千千千番
北二千千千千千千千千一番
北二千千千千千千千千二番
北二千千千千千千千千三番
北二千千千千千千千千四番
北二千千千千千千千千五番
北二千千千千千千千千六番
北二千千千千千千千千七番
北二千千千千千千千千八番
北二千千千千千千千千九番
北三千千千千千千千千番
北三千千千千千千千千一番
北三千千千千千千千千二番
北三千千千千千千千千三番
北三千千千千千千千千四番
北三千千千千千千千千五番
北三千千千千千千千千六番
北三千千千千千千千千七番
北三千千千千千千千千八番
北三千千千千千千千千九番
北四千千千千千千千千番
北四千千千千千千千千一番
北四千千千千千千千千二番
北四千千千千千千千千三番
北四千千千千千千千千四番
北四千千千千千千千千五番
北四千千千千千千千千六番
北四千千千千千千千千七番
北四千千千千千千千千八番
北四千千千千千千千千九番
北五千千千千千千千千番
北五千千千千千千千千一番
北五千千千千千千千千二番
北五千千千千千千千千三番
北五千千千千千千千千四番
北五千千千千千千千千五番
北五千千千千千千千千六番
北五千千千千千千千千七番
北五千千千千千千千千八番
北五千千千千千千千千九番
北六千千千千千千千千番
北六千千千千千千千千一番
北六千千千千千千千千二番
北六千千千千千千千千三番
北六千千千千千千千千四番
北六千千千千千千千千五番
北六千千千千千千千千六番
北六千千千千千千千千七番
北六千千千千千千千千八番
北六千千千千千千千千九番
北七千千千千千千千千番
北七千千千千千千千千一番
北七千千千千千千千千二番
北七千千千千千千千千三番
北七千千千千千千千千四番
北七千千千千千千千千五番
北七千千千千千千千千六番
北七千千千千千千千千七番
北七千千千千千千千千八番
北七千千千千千千千千九番
北八千千千千千千千千番
北八千千千千千千千千一番
北八千千千千千千千千二番
北八千千千千千千千千三番
北八千千千千千千千千四番
北八千千千千千千千千五番
北八千千千千千千千千六番
北八千千千千千千千千七番
北八千千千千千千千千八番
北八千千千千千千千千九番
北九千千千千千千千千番
北九千千千千千千千千一番
北九千千千千千千千千二番
北九千千千千千千千千三番
北九千千千千千千千千四番
北九千千千千千千千千五番
北九千千千千千千千千六番
北九千千千千千千千千七番
北九千千千千千千千千八番
北九千千千千千千千千九番
北百千千千千千千千千番
北百千千千千千千千千一番
北百千千千千千千千千二番
北百千千千千千千千千三番
北百千千千千千千千千四番
北百千千千千千千千千五番
北百千千千千千千千千六番
北百千千千千千千千千七番
北百千千千千千千千千八番
北百千千千千千千千千九番



護國寺おゐん大塚護國寺の内より迂し江城護持の法術願所となるべし筑波山兼帯の坊舎日輪院月輪院と云ふ山開毎年三月廿一日弘法大師の御影供修行あり此日諸人お庭中の林泉を

神巖山護國寺

悉地院と号し音羽町の北にあり新義の真言宗なり和州長谷小池坊に属す開山を席賢僧正と号し公より寺領千二百石を附せられ盛大の地なり

古鹿子に云寺領三百石大猷公守御水る馬脳石観音像開基

本堂本尊如意輪観世音

前川三左衛門入道道寿元禄半の頃持しを黄檗隠元老師の弟子黒竜の潮音前川氏と師弟の縁あるを知て興手に渡し音は授与す後内に桂昌一位尼公崇敬の由事監合考より本堂の柱を撞柱と云ふ木理撞の面に等しく馬脳石天然のものなり

薬師堂

本堂左にあり本尊薬師仏霊像今の所に昔當寺草創の時此地蟹池より出現あり

西國三十三番順禮札所写

開き各其地蟹を因て例と摸す四時草木の枯彫を

歓喜天

諸人の眼をよろこばしむ境内寿命院お妙と桂昌一位尼公崇信の年なるを天下安全の浴油の法を修せられ寺運を永代不退ならしめ

仁王門　仁王の裏に置所の厨子の今宮五社　当所鎮守と云天照太神宮八幡大神春日二天の像は古への火災に焼しとなり　涅槃像大幅　当寺宝物と也　特野の女御の筆なり足代を

大明神今宮大明神三部大権現五社と称る　昔羽町　散柳町　桜木町ホの鎮守なり　柚木迫　掛引上

当寺は延宝九年二月七日上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢ホ高田ヲ菜園の地を賜ひ寺とす依て大聖護國寺と号亮賢初　御在胎の時より御祈祷を勤し故天和元年ヨ　憲廟将軍の宣下蒙て同年五月廿八日都下新建の大聖護國寺を仁和寺より録院家と依て寺領三百石を附し貞享二年十二月廿八日ヨ大聖護國寺住持法印賢廣黄衣を許る後元禄年中　桂昌院殿一位尼公の御志ホよって菜園の地を拝し其頃御建立あり　江戸密乗最大の梵宇ホ結構伸て春時は櫻花爛熳と頗る地勢洛の御室ヨ髣髴　武江神寺録ヨ元禄十丁亥相馬弾正少弼ホ命せ再修造なり此地元上野國寺と称し後白山ヲ跡へ當寺を建立あり　求涼亭云く當寺ハ京の清水寺を模し前の町を音羽町又音羽町九丁あり京ヨ一条より九条　昔の本堂は今の舞臺　青柳町　桜木町　その名あり　堂宇

当寺ホ桂昌一位尼公御遺物を収る今摘佛　閻帳の頃諸人ホ拜せし金銀をちりばめ其結構言葉ホ尽しがたし

星谷の井旧地　護國寺の西の谷ヨあり其地を星谷と号す往古此地ヨ星祭を修る行者あり水浄寺の裏ホ塚のことき有て星産と号け其傍ヨ一ツの井あり此井旱魃ホ水絶せ涌せし後埋ム今ホ跡を存し符水茶水ホ求る人多し　此下流ヨかゝる橋を星谷橋と号く

大野山本浄寺　護國寺の西小篠坂ホあり日蓮宗ホ甲斐の延嶺ホ属せり真珠院日要上人（田漫上人ハ身延山顕是院の住主）を以て開基とす　始谷中ヨありしを宝永三年此地ヨ移し当寺ホ宗祖上人の像あり

七面大明神　神躰を身延雛形の彫像とす　往古本山貫首日悦上人紫衣勅許のゆふつゝ當寺檀那大野氏藤江何某勲功以ての故なり大野氏より授与す　今下部朝臣吉田兼連是と謝せんとて宝蔵より収るところの七面の額あり　九月十八日祭祀前夜より参詣あり　書せる所の額あり　頭虚空蔵の前に智恵を請往者大黒天　日蓮上人安房の清澄に在て其願を集め弘安三年に大黒天の像を造り　及び青梁香を焚て記を日蓮上人の真筆なりとあり　則背面に

此經尊日蓮日讀以青龍寺之五百歳後流布

是生印

此霊像を日親上人感得あらゝ證書を添て後横井氏某當寺に収まるとい　是生し日蓮大士清澄寺の道善を師とし落髪法名の後道善命名の名なり

嶽山清立院　護國寺の裏門より雑司ヶ谷鬼子母神へ参道の右側小坂より傍らなり　雑司ヶ谷本竜寺の持とす　嶽号あり　常唱堂に安置の宗祖上人の霊像は日法上人の真作なりとの相伝あり　正嘉年間鎌倉東疫疾流行する頃行脚の沙門此草堂に投宿の間此地の人々病患を救ひ又別れに臨むの時此霊像を止め置くとい　此影像威霊わ有ふ後世新ふ別像を造る日法上人作の像とこの新像の船中ふ取るとの前よあり元和年間當寺の住僧日意師と感得せし影像なりとい　請雨松　堂前よあり干魃の年八農民この木ふ集り請雨を當寺の

日蓮上人の影像は雨ふ霊験あり郷人大ふ信敬せり　此樹下ふ存せるふの石像は日意師の肖像なり

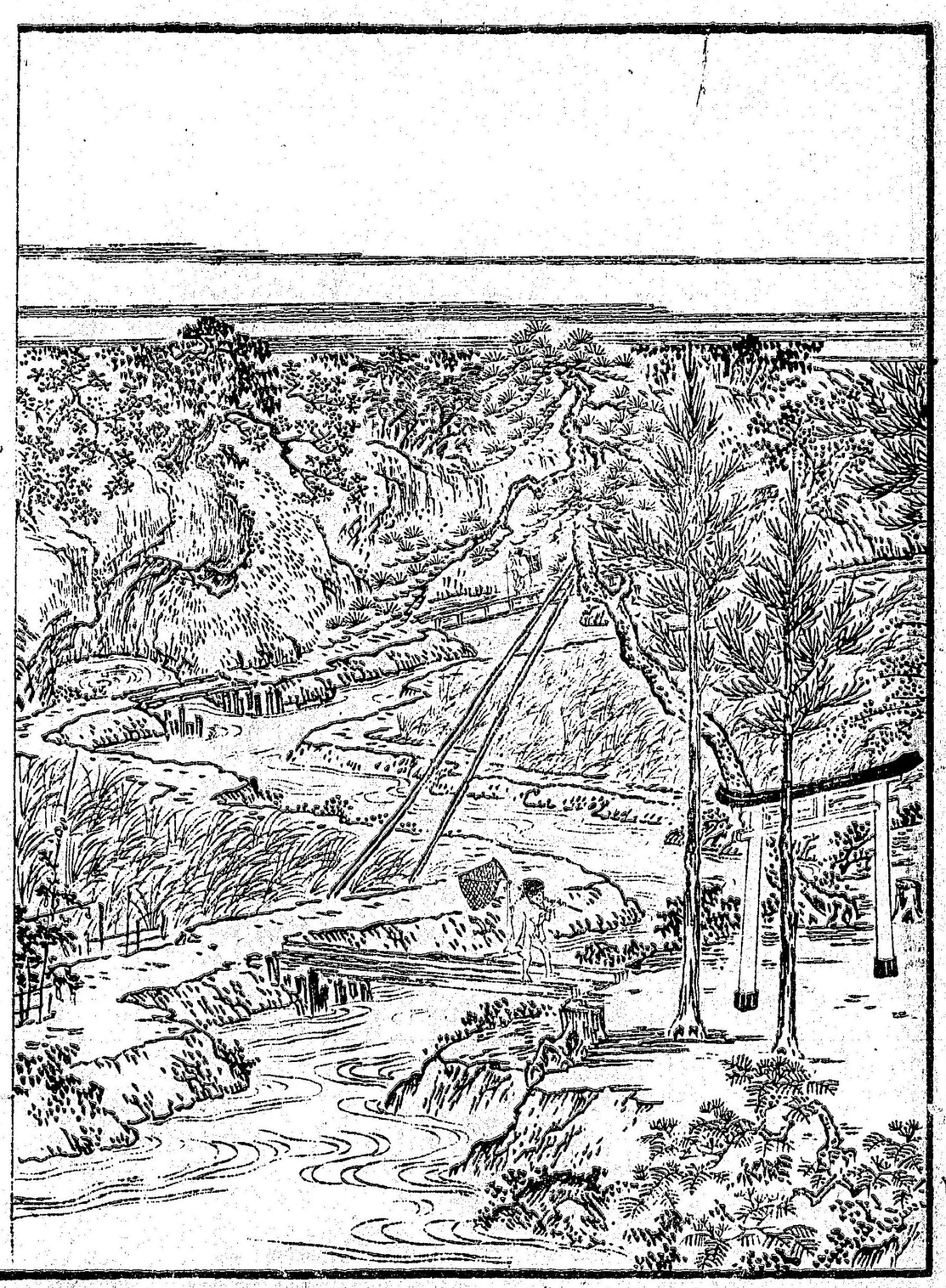
雑司ヶ谷鬼子母神出現所　本浄寺より南ふあり　此地を清土とふ　蒼林の中ふ小社あり　則雑司ヶ谷鬼子母神出現の地ふして同神を鎮る社前ふあるふの井泉を星の清水と号ゝ往古鬼子母神出現の頃此井ふ星の影を顕現せしふあり　ふふ名づくるふの井泉三角　其井形三角　俗土俗字也

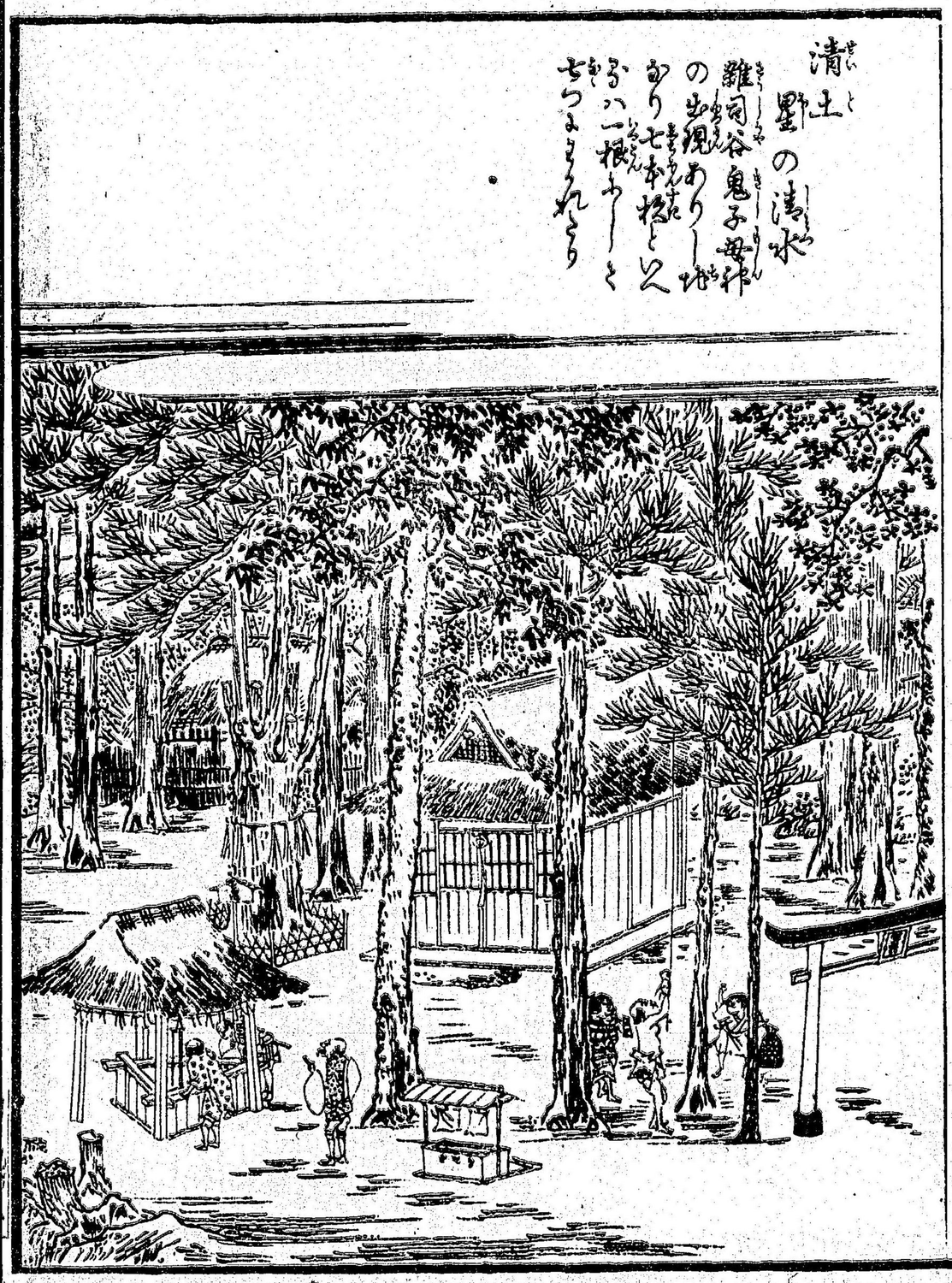
不動山宝城寺　清立院の西の小坂を隔てあり　豆州玉澤の法華寺ふ属す　當寺安置の日蓮大士の影像は大覚大僧正の作なりとい　諸人結縁のあり正五九月の十三日内拝あり　又毎年十月八日より十八日迄法華経讀誦千部修行あり

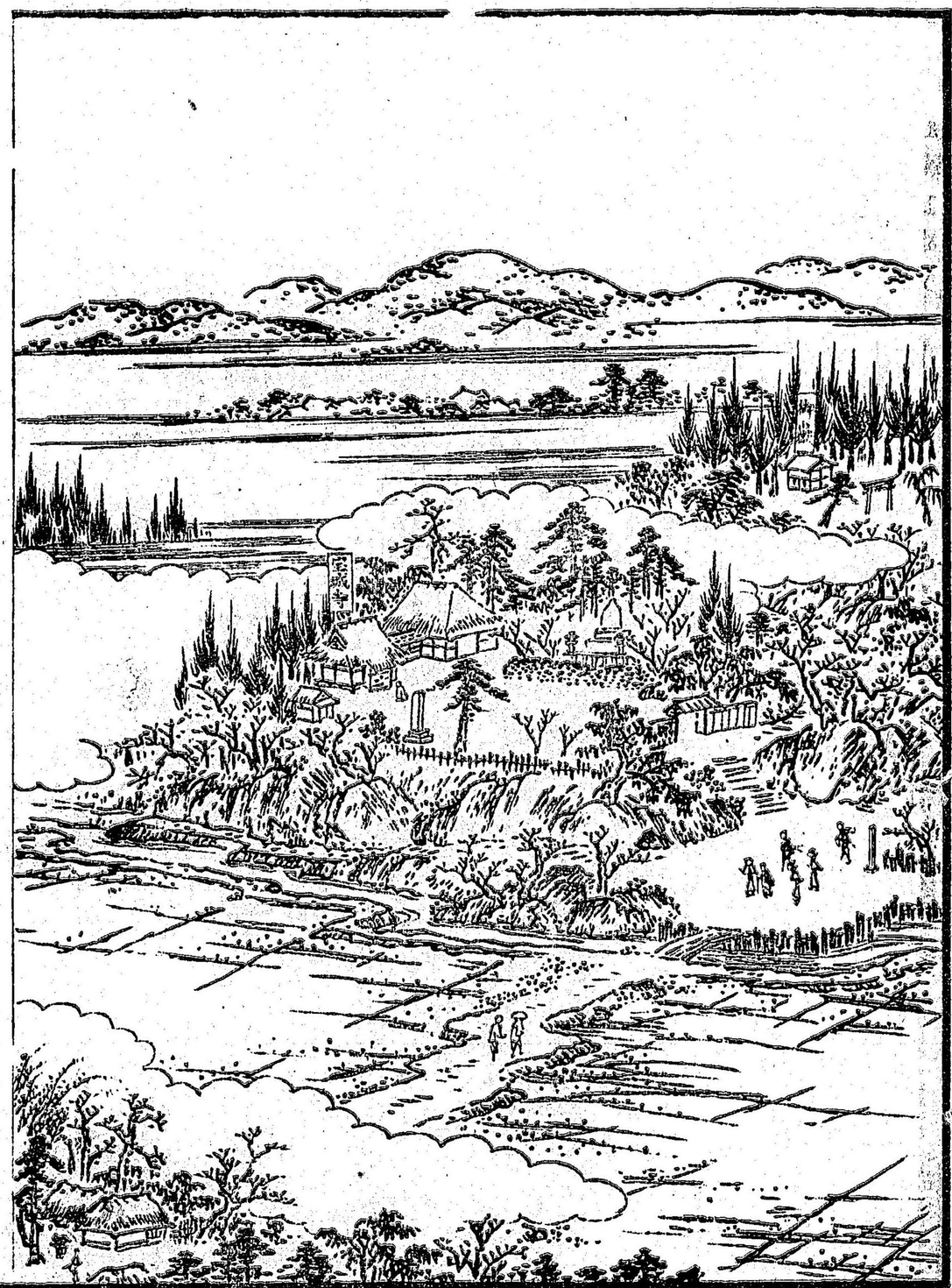
妙永山本納寺　鬼子母神の堂前東の方に小路左の側にあり　法明寺ふ属せり　當寺ふ九老僧の像を安せ　九老僧八日朗上人の徒弟なり所謂日印　日像　日輪　日典　日澄　日善　日乾　日行　日朗　慶安三年庚寅實蔵院日相上

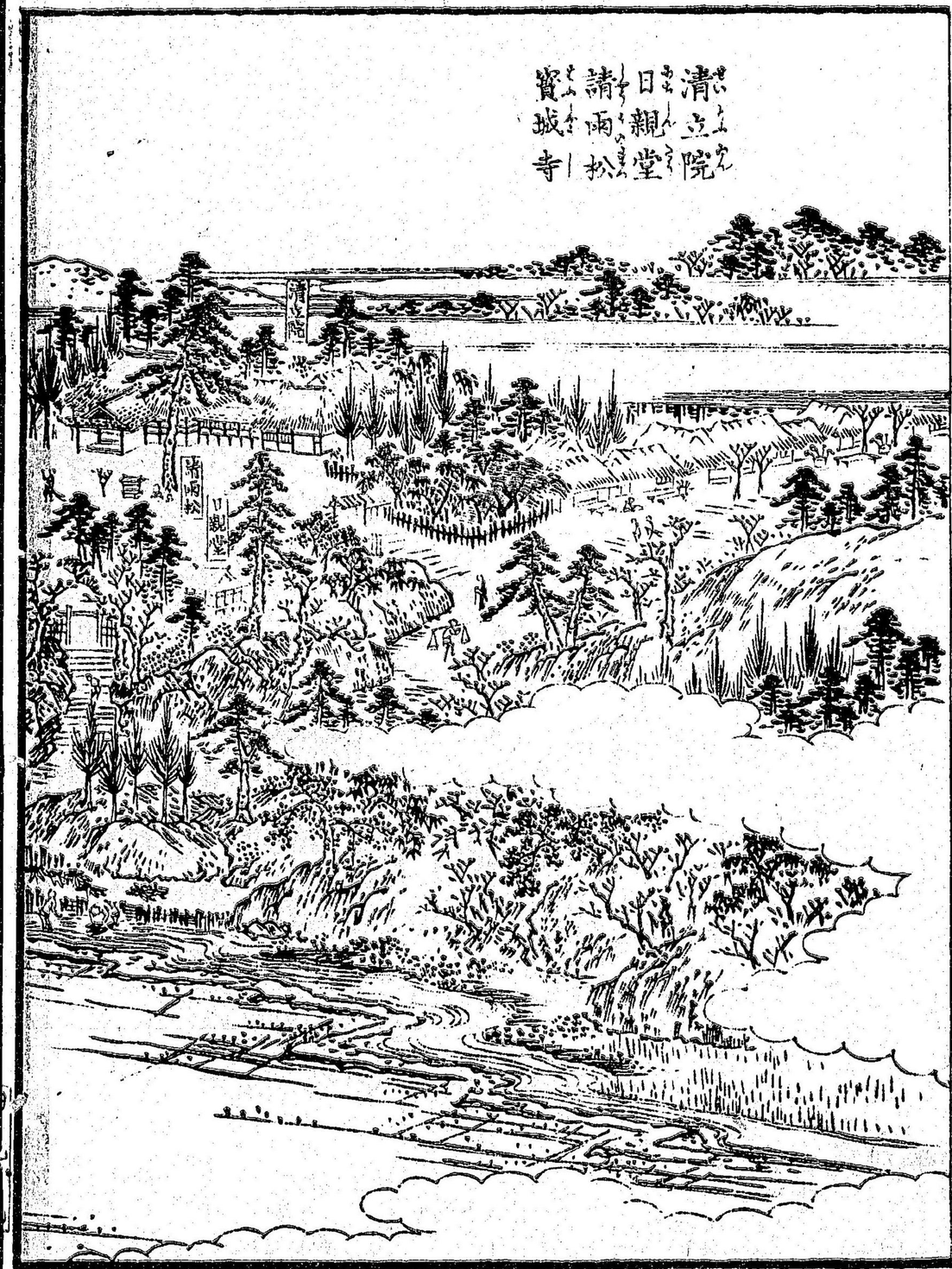
清土墨の清水

雑司谷鬼子母神の出現ありし地なり七本桜と以ふ古い一根わかれ






寶城寺


清立院
日親堂
請雨松
清立院
請雨松
日親堂

人間基〻天神地祇人鬼勸請三宝の諸尊ふ日月星の三護法堂と号す

光天を安也毎月十七日の夕より廿三日の曉まで三光同時に昇天の旦を待終夜誦経唱題怠慢なし是を十夜待と

とり

鬼子母神堂　雜司谷より法明寺の支院大行院の持

木殿鬼子母神　銅像　鬼子母神一名を訶梨帝母天と称す　相殿　日満尼足天鬼子母神の妻　十羅刹女　同　鬼子母神と書せり

鷺大明神祠　堂前左の方にあり　祭る神詳　或云出雲國神戸郡鷺村の鷺浦に鎮坐　素盞嗚尊の妾女皐諦女　此神八疱瘡の守護神　正德の頃松平羽州侯神告に依て是を勧請す　疱瘡寄願の輩廣前の小石を拾ひ得て守護とす　例年八月朔日祭　毎月朔日を以て

稲荷明神祠　堂前右の方にあり　天照大神宮と八幡大神宮と相殿に合祭す　地主の神　田戸山盛南山と云寺に自證院殿

銀杏樹　社前にあり世に石像二王尊　投銀杏子投銀杏と号す

華表　紫銅を以て額に鬼子母神と書せり　本同弥光悦の門人日光上人の筆

正月十五日　前夜一山の僧徒本殿に集會し法華経を讀誦す　同十六日　辰刻一山の僧徒本殿に集會し法華経讀誦す　其式射手六人各小屋に入終て祝詞酒　同日奉射　土俗ひやと唱ヒフ音通す　屋より幕の中に酒の者より弓矢を取て三拾六筋の内日記付五射に及ぶ

清取の間式あり　後射手壹人放つ　削て三拾六筋の内日記付来配振矢取介添各式あり　射手六人射終て後一番より次第に小屋に入此間一山の僧侶又氏子の輩集會し酒五献ありて終る　此式天正文禄の頃より人式と記しも不束なり　寛永十一年長島氏八此所の地主なりて今大門左右に繁茂後世ふ伝へ此長島氏の記録の調乃列挙も此人鬼子母神へ寄進して載せり

同日　鬼子母神衣替

同十八日　万卷陀羅尼経行　四月八日　万卷陀羅尼讀誦　五月十八日　万卷陀羅尼讀誦　六月十五日　此地の農夫集て社頭の草刈排ふ草薙

七月十五日　衣替ふ同十八日迄　万卷陀羅尼讀誦　十月八日　衣替ふ　当社の追儺　男女社壇ふ群集し僧徒内陣ふ候し陀羅尼品を誦る　十三卷終て前の供豆ふ打出も群集の男女爭て是を拾ふ

九月十八日　追儺　衣替ふ　十八日まで奉誦群集す　是と會式詣と云　近世八北三月まで奉詣　経唱題を撃尤置し院主一山の

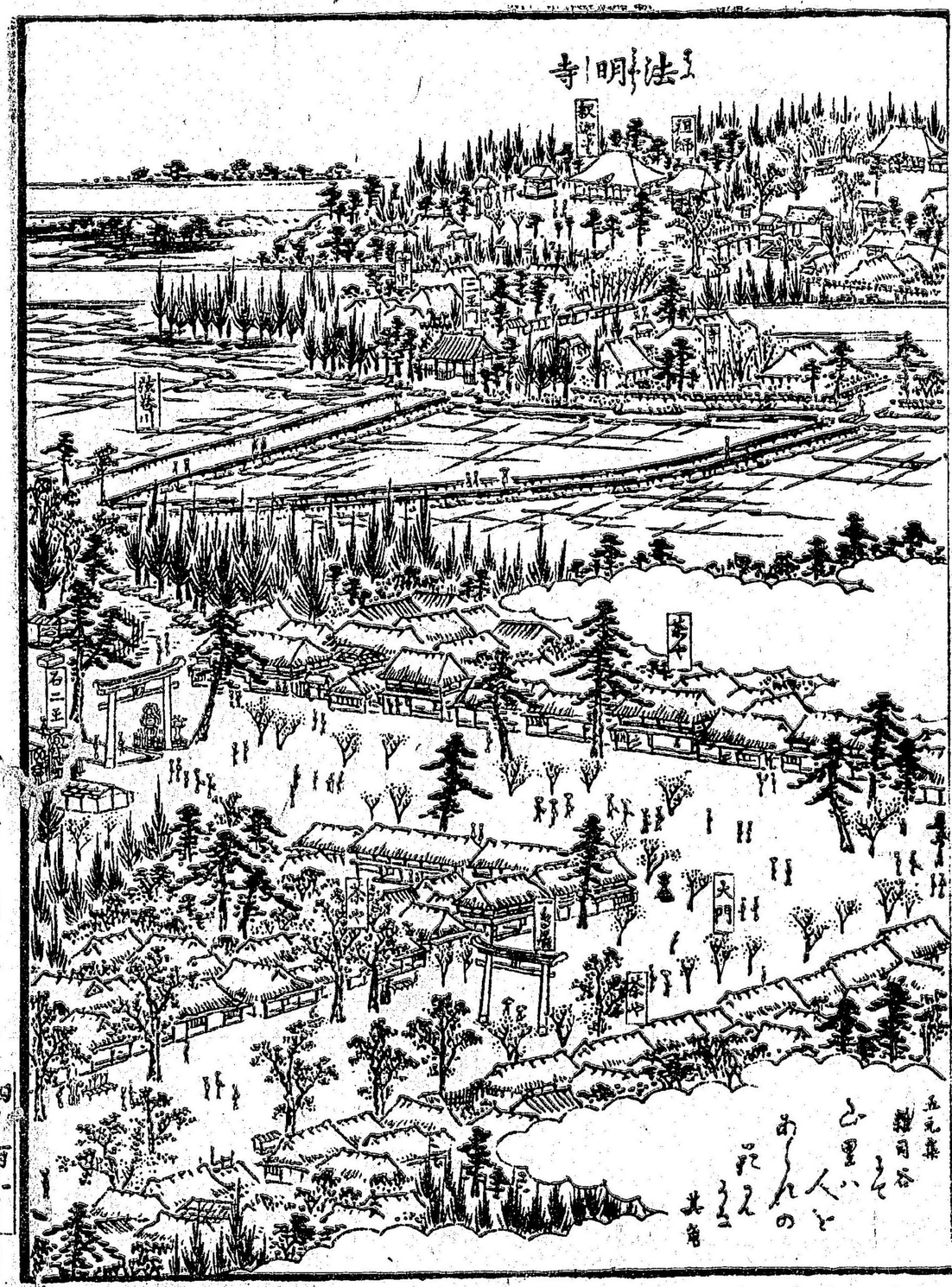
緣起云此本尊ハ永禄四年辛酉五月十六日此地山本氏田口氏なる者連綿

池水ふ星の現も見る浅至地を穿ち鍬下ふ是を得

今護國寺の西ふ其出現の旧跡あり星の清水と称

贈東陽坊ハ今の大行院の乃佛殿ふ安し　依東陽坊第五世日性師に十有余年を歴て然ふ安房國の沙門某　名知　日性師ふ仕へるるふ思ひ密ふ此靈像を

雜司谷鬼子母神堂


法明寺

雜司谷の參詣八每年
十月八日より十三日迄俗
ゆも来詣の繁昌に同し
六日の夜より廿三日の夜迄
群集して殷盛の如
き中央に機関人偶
を設け
此の人形を
間のまと造り
一宗無主
此功勞を宗門の徒
示さんとす

菊鞠
伐法
出合
諸

盗て故郷に帰る其年天正五年忽病を発し一日自口をそゝく
我八元武州雑司谷にあり彼地の衆生機縁既に熟せ正に済度せ
ん時を待く泥土より出現せしを移せしに我意にあらず
直に元の地に帰るべしとありし時に村人大に怖れ畏て再び東陽
坊に迎しに仍諸人霊威あるを知て此川の草堂を営ん
とて往古より稲荷の社跡と云伝へる叢林を開き竟に天正六年
戊寅四月十日に始て斧を下し同五月朔日経営落成しに
安置せ後寛文六年に至て自證院殿新に寶殿を造立せら
今の本殿是なり自昌院殿八州
黄門の息女に安藝大守の令室
此地八選に都下を離ること
あるに協ふに常に詣人絶ざを依て門前の左右に
貨食店軒端を連ねて十月の會式に八殊更群集絡繹として
織るが如し風車麥藁細工の獅子川屋の飴を此地の名産とし

此地にて製する所の麥藁細工の獅子八背高四寸家町
小児の久米女と云る者も人の母に孝ありて家元より貧しく
孝養仏のまゝ高木の鬼子母神へ詣て深く
願を掛き高木の鬼子母神へ詣て深く
寛延二年の春ひつきて麥藁
ひつきて麥藁
なりて獅子の
南無妙獅子の獅子と
造り出と高木
高ひ
獅子の
竟に
獅子の
堂人
易く
麥の
麥の
ひゝりのかゝべ

又當山ハ花の名所なり近年境内ニ櫻数多植て往昔ニ復せしかとも

（北条家分限帳江戸雑司谷太田新六郎所領とあり）

麥藁細工角兵衛獅子ハ昔高田四ッ家町ニ住し条女なる

女子製し初なりとぞ此条女ハ母一人ありしか家貧しく孝

養心のまことあつしかるを以て常に雑司ヶ谷の鬼子母神へ

詣し深く此事を祈願しけるに其孝の冥慮ようやく

有りて寛延二年の夏麥藁を以て角兵衛獅子の形を造り

そめしより毎年雑司谷の鬼子母神ことに参詣多うして頃

なりハ此獅子を買ふ人夥しく竟に麥藁細工のことハ毎年

ときめきれハ夫より後ハ心やすく母を養ふ

百度参　寄願あるの人社前を往返し百度参拝を以て俗に百

度詣と号し或人云く此すハ當社鬼子母神を以て權輿とせ

る名ハ十羅刹女と始とし十人の鬼子母神と皆此所にて十と千との

間を取り百度詣をなすなり千度詣ハ千人の鬼子母神と皆此所にて十と千との

意なり

咸光山法明寺　同北の方ニあり支院八宇あり最古刹ニ閑

寂なる寺院なり　庫裡ハ鉈作なりと云ふ

釋迦堂　昔釈迦多宝両如来の像を安置す　余堂中ニ千躰仏を安置す

銀杏樹　同一堂前にあり往古擂鉢の植しなり

祖師堂　同釈迦堂の右に並へ小に宗祖日蓮大士の影像を安置す正

鬼子母神の前にあり　雑木なり　當寺日源上人の御

安國論演説の躰想を模せり　建永三年大義眼日義上人修

師と称せ　補正行の息女ハ如典入道某の室なり頃夫婦ともに大願あり

壇を建永十二年乙酉のとし再び此影像の彩色をかへしと云ふ　縁起に此堂宇ハ當寺の

弘仁九年戊戌飛騨匠作なり大古當寺真言宗なり時源家累代祈願の僧侶

堂宇ハ今も昔のまゝなり　釋迦如来石像　往古武夫横死の難を遁れ報恩の為旧

昔のまゝの傷ハ志趣を顯す　鯨鐘　同ニ銘文へ寛永二十二年甲申鋳せし洪鐘なり

記せし石碑を建し　雑司谷より板橋へ行く方の道端にあり此地に

盤龍の形を鋳付　諸人見て奇異なりとす此形を鋳附の器ハ曲尺拇天秤なり

時に亦数ハ頃なりとも此形を鋳附の器ハ曲尺拇天秤なり

擂の南日蓮宗法性寺にあり　鯨鐘の撞木ハ度量衡の意を表しるなり

二王門　左右に金剛密迹の像を置く　京師鴨川の東岸今出川

運慶の作なり

正月元日　同三日迦本方ニおいて釈迦堂ニ十羅尼修行あり　二月十五日　涅槃会

古法の式例あり　同十三日　釈迦堂ニ十羅尼修行あり　五月十三日　釈迦堂ニ十羅尼修行あり　七月

音楽練供養　四月八日　誕生会上巳同一同日より夏の間説法あり

七日虫拂　九月十三日　千光王羅尼讃誦修行あり　十月六日　同七日八日迦の間　同日

経獅と唱へ誦経す　此日より會式中練供養修行あり　前に花市立

同十三日御影供（俗誤て八日とす）廿三日延来儀
相伝の当寺ハ弘仁元年庚寅草創や〻く往古ハ真言宗の
道場なりしを（或云義覚大師の開創なりと）正嘉元年丁巳厳誉律師駿州岩
本の実相寺より〻く日蓮上人の法を聞直ち宗風を慕し上人の
弘法よりしを乃法号を厳誉院日源と称す（当寺開山是也中
竪秀坊と云ふ駿州賀島の実相寺に住し学行群に秀でたり）
按ず寺伝に当寺の山号咸光と云ふ東鑑に載る所の咸光寺と
大なる誤なり（同第三巻小山田の茶下谷口天神の下に詳なり）
弦巻川（当寺二王門の前を東流する細き溝川を号く古へハ御引川とも唱へたりと
いひ伝へたれとも共に由緒を失ふ水源ハ池谷の辺に発し下流ハ清土の
辺へ出て普羽町の西の方を歴て江戸川に合せり）
大行院　鬼子母神の別当なり　往古ハ東陽坊と云天正年間
加州侯の始祖前田利家朝臣建立せしなり堂内に
日蓮上人の弟子六老僧の影像を安置せ（日像日朗日興日昭日向日頂以上六老僧なり
或人云く此像ハ始谷中感應寺に在り小畑勘兵衛尉景憲檀那
彼寺改宗の頃一躰紛失しなれハ我を当寺へ収めたり
寺なれハ彫刻しく例むなり又自らの肖像もあり　堂に
数ふ）

当院に宗祖歴代の真筆なしに上古の調度多を収蔵す
其余深草不可思議の
経題多なり
蓮成寺　同東に隣る当寺ハ本山十三世日延上人の開創なりと
いふ十八老僧の像を安し（日源日家日保日弁日法日傳日位日秀
大日日得日合日賢日高日実日禮日詔
日忍日門以上
十八人なり）

国立国会図書館